

東関東における縄文時代後・晩期の竪穴住居儀礼

西村広経

要旨

縄文時代後・晩期の遺跡では多様かつ多量の儀礼関連遺物が出土することから、儀礼行為が活発に行われたものと考えられる。本稿では竪穴住居跡で出土する 11 種の儀礼関連遺物を包括的に扱い、竪穴住居における儀礼の様相を検討した。対象とした地域は千葉県域を中心とした東関東で、対象とした時期は後期中葉の加曾利 B 1 式期～晩期中葉の安行 3 d 式期である。竪穴住居跡で出土した儀礼関連遺物の分析により、後期後葉から晩期前葉にかけて儀礼関連遺物が多量化・多様化することが明らかになった。また、竪穴住居における儀礼行為と住居の規模との間には相関関係があり、より規模の大きい住居ほど儀礼の痕跡が顕著である。さらに、竪穴住居跡では住居自体よりも新しい、あるいは古い時期の儀礼関連遺物がしばしば出土する。本稿ではこれらを、すでに廃絶された過去の住居跡や、すでに使われなくなった過去の遺物を利用した儀礼の痕跡であると解釈した。こうした痕跡は後期後葉以降に顕著になる。以上のことから、東関東における竪穴住居儀礼は、後期後葉を画期として活発化・多様化するものと結論づけた。

1. はじめに

縄文時代後期・晩期には中期以前と比べて土偶や石棒といった儀礼に関連するとされる遺物が多量化・多様化することが知られている。それらは社会の停滞を示すものと解釈されたこともあったが、近年では民族考古学的な成果を背景に、社会が複雑化していく過程で儀礼行為が重要な役割を果たしたとする主張もみられる（高橋 2014 など）。渡辺仁氏による縄文階層化社会論（渡辺 1990）が研究史上のエポックとなっていることは周知のとおりであろう。こうした研究状況から儀礼行為の実態解明は縄文文化研究において重要な課題といえる。

本稿で着目するのは、竪穴住居における儀礼である。検出された縄文時代の竪穴住居跡では、炉石の抜き取り（桐原 1976）、炉の破壊・封鎖（金井 1997）、意図的な放火（小暮 2004）、パン状炭化物の出土（中村 2007）といった儀礼行為の痕跡がみられることが指摘されている。

また、廃絶後の竪穴住居跡における儀礼行為の可能性も指摘されている。竪穴住居跡の覆土中から完形土器がまとまって出土するいわゆる「吹上パターン」（小林^達 1974）について、山本暉久氏は廃絶後の竪穴住居を人為的に半ばまで埋め戻した凹地に土器を一括廃棄したものであり、儀礼的行為の痕跡と解釈している

（山本 1978）。

縄文文化において竪穴住居は居住施設であるばかりでなく、儀礼の場としての機能を有していたものと考えられる。

本稿で検討の対象とする空間的範囲は千葉県域を中心とした東関東であり、時間的範囲は後期中葉の加曾利 B 1 式期から晩期中葉の安行 3 b 式期までである。当該地域では近年後・晩期集落の大規模な調査が相次いでおり、竪穴住居跡で釣手土器や異形台付土器のような特殊な土器、土偶や石棒などが出土する例が多数報告されていることから分析対象として適当であると思われる。

また当該地域・時期には大型住居の存在が知られている。大型住居では儀礼関連遺物の出土が顕著であることから、儀礼に関連する施設であった可能性が指摘されている（阿部^秀 2001；高橋 2001）。

関東地方における後・晩期の儀礼研究は各種の遺物を対象として行われてきた。異形台付土器・注口土器・釣手土器・ミニチュア土器などの特殊な土器、土偶・土版・耳飾・手燭形土製品・動物形土製品などの土製品、石棒・石剣・独鈷石などの石製品が儀礼に関連する遺物として扱われ、膨大な研究の蓄積があるが、紙幅の都合上それら全てをここで具に提示することはかなわない。

これらの儀礼関連遺物の研究は、そのほとんどが各

器種の型式編年論および機能・用途論である。各器種の研究は進められている一方で器種間の関係を扱った論考はあまり例がない。堀越正行氏による異形台付土器と土偶との関係を扱った論考などがあるが多くはない（堀越 1997）。儀礼関連遺物を包括的に扱う研究となるとほとんど例がない。

後期・晩期の儀礼の様相を復元するためには各種の儀礼関連遺物に関する詳細な研究が必要不可欠である。しかし、各器種の研究を進めることが儀礼の解明に直結するようには思われない。なぜなら、竪穴住居跡では複数種の儀礼関連遺物が出土することから実際の儀礼の場では複数種の道具を組み合わせ用いたことが想定されるからである。図1は千葉県市原市能満上小貝塚11号住居で出土した儀礼関連遺物である。土偶、土版、耳飾、手燭形土製品、石棒といった複数種類の儀礼関連遺物が出土している。これらを組み合わせ用いた儀礼に用いたのであろう。

また、民族誌からも儀礼関連遺物を組み合わせ用いたことが伺える。P. ウィスナー氏はパプア・ニューギニアのエンガ諸部族における儀礼の一例を紹介している。ウィスナー氏によれば、西部エンガではKepelと呼ばれる儀礼が行われる。Kepelは様々な儀礼行為により構成されるが、その一つに聖なる器物を用いた儀礼がある。聖なる器物として用いられるのは、女性の生殖器を想起させる形状の石とyupiniと呼ばれるかご細工の人形である。yupiniは男性の祖先の姿を表現しているとされる。儀礼専用の施設の中でyupiniと女性の聖なる石を用いて性交渉を模倣し、豊穡を祈る呪文が唱えられる。その後yupiniにブタの脂身が注がれ（ブタはエンガ社会では特に重要視されている）、女性の聖なる石にも脂身が塗ら

れる。儀礼の最終日に石は脂身で包んで埋められた（Wiessner2001）。

エンガはサツマイモを中心とした園耕（horticulture）社会であり縄文後期・晩期社会とは状況が異なるため直ちにあてはめることはできない。しかし、後期・晩期には多様な儀礼関連遺物が存在すること、1つの遺構から複数種が共伴して出土することを鑑みると、民族誌にみられるように儀礼行為の中で複数種の儀礼関連遺物が用いられたことを想定すべきであろう。

個別の器種の検討からは複数器種を用いた儀礼を復元することはできず、儀礼の実態を解明するためには儀礼関連遺物を包括的に扱う必要があると考えられる。

一方、各器種の変遷に関する研究から重要な論点を抽出することができる。それは、後期後葉から晩期初頭にかけて儀礼のあり方が大きく変容した可能性があるということである。いくつかの器種の変遷の中で後期後葉～晩期初頭に画期があることが指摘されているが、大きな変化が複数の器種でほぼ同時期に起こっていることから、後期後葉から晩期初頭にかけての時期に儀礼総体として大きな変容があったことが想定される。

異形台付土器は後期後葉に器形が大きく変化する。加曾利B2式期に出現し、曾谷式期までは円筒形の口縁部、膨らんだ胴部、円筒形の台部という3つの部位から構成される。しかし、安行1式期から口縁部と胴部との境界が不明瞭になり、安行2式以降は口縁部と胴部が一体化して鉢状になる（内田 1978、1984）。また、安行2式期に手燭形土製品が分化する。安行3a式期には台部が変容し異形脚付土器が派生する（蜂

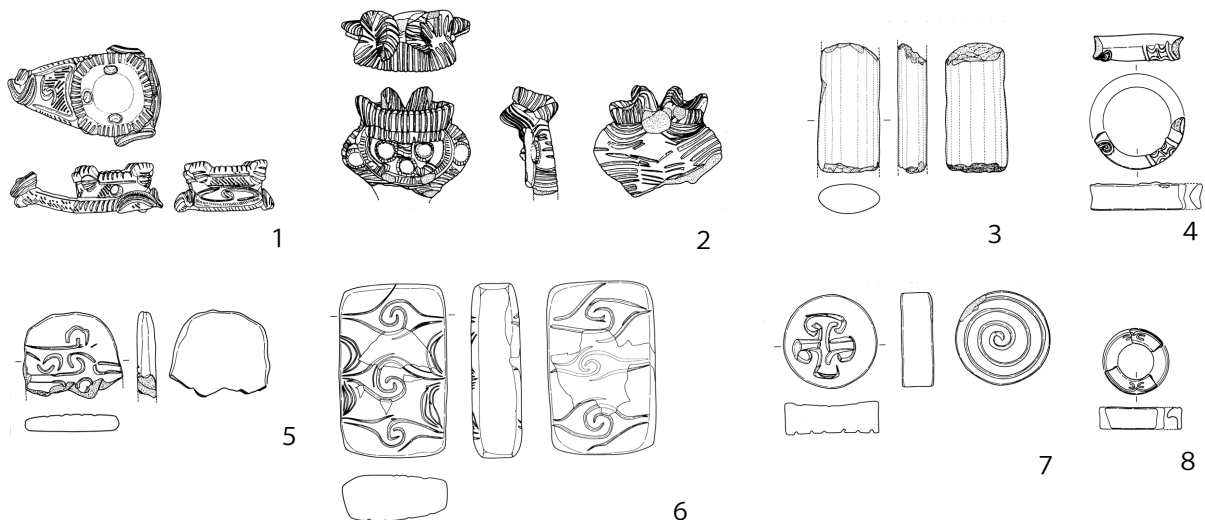


図1 能満上小貝塚11号住居出土遺物

屋 2008)。

耳飾の変遷では後期後葉の安行 1 式期と安行 2 式期との間に画期があるとされる。設楽博己氏によれば、安行 2 式期以降に大形化・多様化し、精緻な文様を施す例がみられるようになるという(設楽 1983)。

石棒類について、後期中葉には断面円形の成興野型石棒が主体を占めるが、後期後葉に扁平化が進み、石剣が主体を占めるようになり、晩期には多様な型式が認められるようになる(後藤 1986、1987)。

また、儀礼関連遺物が多く出土する大型住居についても後期後葉から晩期初頭にかけて変化が認められる。後期中葉の大型住居は千葉県市原市祇園原貝塚などで検出されており、長軸長が 15 メートルを超える例も多い。しかし、安行 1 式期から安行 2 式期にかけて長軸が 10 メートルを超えるような例がみられなくなる。ところが、晩期に入ると再び長軸が 10 メートル以上を測る例が出現する(吉野 2007)。

このような事象が後期後葉から晩期初頭にかけてほぼ同時期に起こっている。

以上より、研究上の問題として以下の 2 点があげられる。

- ①儀礼関連遺物を包括的に扱う研究がないこと。
- ②後期後葉～晩期初頭にかけて儀礼が大きく変容した可能性があること。

これらの問題点をふまえて、本稿では竪穴住居跡で出土する 11 種の儀礼関連遺物(異形台付土器、注口



図 2 遺跡分布図

土器、釣手土器、ミニチュア土器、土偶、土版、耳飾、手燭形土製品、動物形土製品、石棒・石剣、独鈷石)を包括的に扱い、問題点②で指摘した時期およびその前後にあたる後期中葉から晩期中葉の竪穴住居儀礼の様相を検討していく。

2. 分析

2.1. 資料の抽出

本稿で対象とする空間的範囲(千葉県域を中心とした東関東)、時間的範囲(加曾利 B 1 式期～安行 3 d 式期)に該当する集落遺跡 33 遺跡(図 2)を分析対象とした。これらの集落遺跡から当該時期の竪穴住居跡を抽出したところ 406 例が確認された。

抽出した竪穴住居跡のうち、儀礼関連遺物が少なくとも 1 点以上出土している住居跡は 222 例が確認された。住居跡ごとの儀礼関連遺物出土量は最小 0 点、最大 112 点、平均で約 3.4 点となっている。

また、これらの遺物には住居跡の床面で出土するもの、覆土中で出土するものがある。さらに、編年的に住居の帰属時期とは異なる時期に位置づけられる遺物も少なくない。しかし、集成の段階ではそれらの問題点を考慮せず、住居範囲内で出土した遺物は一律に当該住居に帰属するものとして扱った。詳細な出土地点が明記されていない場合には報告書の記載に従って住居への帰属関係を決定した。

なお、複数の竪穴住居跡が重複しており、出土遺物の帰属関係を分けることができない場合には、重複している住居跡をまとめて 1 例として扱っている。

儀礼関連遺物は総数 1396 点が確認された。器種別では耳飾が最も多く 528 点を数える。最も少ないのは独鈷石で 12 点が確認された。

各住居の帰属時期、規模、出土した儀礼関連遺物を表 1～表 9 に示した。

2.2. 儀礼関連遺物の由来

竪穴住居跡で出土する儀礼関連遺物はいかなるコンテキストの下出土しているのだろうか。儀礼行為または他の意図的行為の結果か、あるいは偶然に流入したものだろうか。

抽出した資料から判断する限り、少なくとも一部の儀礼関連遺物は人間の意図的行為の結果として認定できる。なぜなら、竪穴住居跡における儀礼関連遺物の出土点数には大きな偏りがあるからである。図 3 に儀礼関連遺物出土量の度数分布を示した。

竪穴住居跡 406 例における儀礼関連遺物の出土量は平均で約 3.4 点である。標準偏差は約 8.5 なので、

表1 竪穴住居一覧表(1)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石 剣	独 鈷 石	規模による 分類
1	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区37号住居	加曾利B3式	4.9	4.6												I群
2	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区45号住居	堀之内1式～加曾利B式	4.9	4.6												I群
3	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区58号住居	安行3C式	7.0	5.2				1	1					1		Ⅱ群
4	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区59号住居	加曾利B1式	15.7	15.2	1	3		3	1					3		Ⅶ群
5	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区62号住居	安行3a式	5.1	4.4	1						1			1		I群
6	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区63A号住居	安行3b式	7.0	6.2	1	1			3		5			1		Ⅱ群
7	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区79号住居	安行3a式～安行3b式	5.5	4.9												Ⅱ群
8	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区102号住居	安行1式	5.5	5.0												Ⅱ群
9	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区103号住居	安行1式	9.3	8.3		1		1			2					Ⅳ群
10	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区110号住居	堀之内式～加曾利B式	10.2													Ⅴ群
11	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区112号住居	加曾利B2式	7.5	7.2												Ⅲ群
12	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区113・114号住居	加曾利B2式～曾谷式	19.2	18.8	1	1	3	3		1	2					Ⅶ群
13	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区118号住居	安行3a式～安行3b式	15.6	14.8	2		1	9	2	3	22	2	1	5		Ⅶ群
14	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区120号住居	安行2式	4.6	4.5												I群
15	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区124B号住居	加曾利B2式	18.2	16.2			1	1								Ⅶ群
16	宮内井戸作遺跡	Ⅱ地区135A・B号住居	加曾利B1式	17.0	14.2												Ⅶ群
17	宮内井戸作遺跡	Ⅱ-2地区14号住居	加曾利B2式	5.8	4.9												Ⅱ群
18	宮内井戸作遺跡	Ⅱ-2地区21号住居	前浦式	5.8	4.1						2						I群
19	宮内井戸作遺跡	Ⅱ-2地区27号住居	曾谷式	7.0	5.3												Ⅱ群
20	宮内井戸作遺跡	Ⅱ-2地区31号住居	安行1式	5.0	4.2												I群
21	宮内井戸作遺跡	Ⅲ地区3号住居	加曾利B1式	4.2	3.8												I群
22	宮内井戸作遺跡	Ⅲ地区4号住居	加曾利B1式	3.0	2.7		1										I群
23	宮内井戸作遺跡	Ⅲ地区5号住居	加曾利B式	4.2	3.5												I群
24	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区1号住居	安行1式	8.6	7.0												Ⅲ群
25	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区6号住居	加曾利B1式	4.6	4.5												I群
26	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区7号住居	堀之内1式～加曾利B式	5.6	5.4												Ⅱ群
27	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区14号住居	堀之内1式～加曾利B式	8.0	7.3												Ⅲ群
28	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区15A・B号住居	加曾利B式	9.3	8.6												Ⅳ群
29	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-2地区16号住居	堀之内1式～加曾利B式	7.8	6.6												Ⅲ群
30	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区7号住居	安行3b式	5.3	4.0												I群
31	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区8号住居	安行1式?	5.0													I群
32	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区9号住居	安行3b式～安行3c式	6.3	6.2												Ⅱ群
33	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区10号住居	安行3b式～安行3c式	4.2	3.2												I群
34	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区12号住居	加曾利B2式	8.0	7.1		2	1	1								Ⅲ群
35	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区15号住居	安行3b式～安行3c式	6.4	5.0												Ⅱ群
36	宮内井戸作遺跡	Ⅲ-3地区16号住居	加曾利B式～曾谷式	10.6	8.8												Ⅳ群
37	三直貝塚	SI-001	加曾利B3式～安行1式	4.2	3.9		1			1					5		I群
38	三直貝塚	SI-002	安行3a式	7.2	5.6					1		2					Ⅱ群
39	三直貝塚	SI-004B	安行2式～安行3b式	12.5	11.6	2			7			45			7		Ⅵ群
40	三直貝塚	SI-008	安行3c式	4.4	3.3					1		1					I群
41	三直貝塚	SI-010	安行3a式～安行3b式			1						3			1		
42	三直貝塚	SI-011A	安行2式	9.3	8.5	1											Ⅳ群
43	三直貝塚	SI-011B	安行3a式	5.8	5.1				1			6					Ⅱ群
44	三直貝塚	SI-011C	安行2式～安行3a式	5.0	4.7	1	1		2			13					I群
45	三直貝塚	SI-011D	安行1式	7.2	6.5										3		Ⅱ群
46	三直貝塚	SI-012	前浦式														

表 2 竪穴住居一覧表 (2)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石剣	独 鈷石	規模による 分類
47	三直貝塚	SI-013	晩期前葉														
48	三直貝塚	SI-022A	安行2式～安行3a式	8.6	8.0		1		3	2		14			2		Ⅲ群
49	三直貝塚	SI-022B	曾谷式～安行1式	6.3	6.2	1			1	2		3					Ⅱ群
50	三直貝塚	SI-026	前浦式	6.3	5.9												Ⅱ群
51	三直貝塚	SI-027	姥山式	6.0	5.4												Ⅱ群
52	三直貝塚	SI-028	加曾利B2式～加曾利B3式	10.2	9.4	1						2					Ⅳ群
53	三直貝塚	SI-029	安行3a式	10.2	7.9							2			2		Ⅳ群
54	三直貝塚	SI-032	曾谷式～安行1式	6.4	4.9												Ⅱ群
55	三直貝塚	SI-033	安行3a式～安行3b式														
56	三直貝塚	SI-037	加曾利B1式	5.2													Ⅱ群
57	三直貝塚	SI-038A	安行1式～安行2式	6.8	6.7												Ⅱ群
58	三直貝塚	SI-038B	安行1式～安行2式	7.2	7.0												Ⅲ群
59	三直貝塚	SI-041	安行2式～安行3a式														
60	加曾利貝塚	東傾斜面JD-20	加曾利B3式	18.5	16.4	3				2					2		Ⅶ群
61	祇園原貝塚	25号住居	安行1式～安行3a式	9.8	8.7					1		2			1		Ⅳ群
62	祇園原貝塚	26号住居	安行2式～安行3b式	5.2	5.0							1			3		Ⅰ群
63	祇園原貝塚	29号住居	加曾利B1式～加曾利B2式	6.5	7.6												Ⅱ群
64	祇園原貝塚	31号住居	加曾利B式	4.4	4.0												Ⅰ群
65	祇園原貝塚	33号住居	加曾利B1式	4.6	4.0												Ⅰ群
66	祇園原貝塚	34号住居	加曾利B式	5.6	5.4												Ⅱ群
67	祇園原貝塚	39号住居	安行1式	5.5	5.1												Ⅱ群
68	祇園原貝塚	40号住居	安行2式～安行3a式	7.5	6.5							3					Ⅱ群
69	祇園原貝塚	41号住居	安行1式～安行2式	6.3	6.2			1		2							Ⅱ群
70	祇園原貝塚	42号住居	加曾利B2式～加曾利B3式	8.5	7.8			3		2							Ⅲ群
71	祇園原貝塚	43号住居	安行1式	7.6	7.2												Ⅲ群
72	祇園原貝塚	44号住居	安行1式～安行2式	5.5	5.0												Ⅱ群
73	祇園原貝塚	46号住居	安行1式～安行2式	7.2	6.4	1						2			1		Ⅱ群
74	祇園原貝塚	47号住居	加曾利B3式	8.3	8.3					1					1		Ⅲ群
75	祇園原貝塚	48号住居	安行1式～安行3a式	7.6	6.9	1				1		4					Ⅲ群
76	祇園原貝塚	49A・B号住居	曾谷式	17.8	14.8	2		1		1					4		Ⅶ群
77	祇園原貝塚	50号住居	加曾利B2式～加曾利B3式	18.2	17.6			16		2	1	3			3		Ⅶ群
78	祇園原貝塚	51号住居	加曾利B1式	9.7	9.4												Ⅳ群
79	西広貝塚	6号住居	加曾利B2式														
80	西広貝塚	10号住居	加曾利B式?	4.2	3.7												Ⅰ群
81	西広貝塚	18号住居	加曾利B1式														
82	西広貝塚	21号住居	加曾利B1式	8.1	7.3												Ⅲ群
83	西広貝塚	25号住居	加曾利B2式	4.6	3.8												Ⅰ群
84	西広貝塚	26号住居	加曾利B3式	6.9	6.8												Ⅱ群
85	西広貝塚	35号住居	加曾利B2式	5.3	4.9												Ⅰ群
86	西広貝塚	53号住居	加曾利B3式	5.5	5.5				2	2		1					Ⅱ群
87	西広貝塚	58号住居	加曾利B3式	7.0	6.0	1	2			1		1			1		Ⅱ群
88	西広貝塚	60号住居	曾谷～安行1	7.0	6.0												Ⅱ群
89	菊間手永遺跡	O3号住居	安行3a式	6.5	6.5	1			1					1	1		Ⅱ群
90	菊間手永遺跡	O11号住居	安行3a式	4.0	4.8												Ⅰ群
91	菊間手永遺跡	O20号住居	安行3a式	4.2	4.3												Ⅰ群
92	菊間手永遺跡	O21号住居	安行3a式	5.5	5.0												Ⅱ群

表3 竪穴住居一覧表(3)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石剣	独 鈎 石	規模による 分類
93	菊間手永遺跡	043号住居	前浦式	12.0	10.0												V群
94	築地台貝塚	3号住居	安行3a式	8.2	7.6		1								2		Ⅲ群
95	能満上小貝塚	3号住居	安行2式	7.2													Ⅲ群
96	能満上小貝塚	9号住居	曾谷式～安行1式	7.0	6.4												Ⅱ群
97	能満上小貝塚	11号住居	安行3a式	6.9	6.6					2	3	6	1		1		Ⅱ群
98	能満上小貝塚	12号住居	安行3b式～安行3c式	11.5	7.5					2		2		2	10	1	Ⅳ群
99	能満上小貝塚	13号住居	安行3c式～安行3d式	7.6	3.9					1		1			4		Ⅱ群
100	能満上小貝塚	14号住居	安行3c式～安行3d式	6.1	6.1					2					1		Ⅱ群
101	能満上小貝塚	15号住居	安行3c式～安行3d式	12.7	10.7					4				2	1		Ⅵ群
102	能満上小貝塚	16号住居	安行3c式～安行3d式	5.9	5.1							1					Ⅱ群
103	能満上小貝塚	17号住居	安行1式～安行2式														
104	能満上小貝塚	18号住居	安行1式～安行2式	6.6													Ⅱ群
105	能満上小貝塚	19号住居	安行3a式	5.2	5.0												I群
106	能満上小貝塚	21号住居	加曾利B3式～安行1式	8.0	7.0												Ⅲ群
107	能満上小貝塚	22号住居	安行1式	6.7	5.9												Ⅱ群
108	能満上小貝塚	23号住居	加曾利B式	4.5	4.0												I群
109	能満上小貝塚	24号住居	加曾利B3式	6.0	5.0												Ⅱ群
110	貝の花貝塚	5号住居	曾谷式～安行1式	4.5	4.5												I群
111	貝の花貝塚	12号住居	安行3c式	7.9	7.8										4		Ⅲ群
112	下水遺跡	19号住居	安行1式?	7.8	7.4												Ⅲ群
113	下水遺跡	20号住居	加曾利B1式～加曾利B3式	9.2	7.6	2				3		1					Ⅲ群
114	下水遺跡	21号住居	堀之内2式～加曾利B2式	12.2	10.8	1											Ⅵ群
115	下水遺跡	39号住居	加曾利B2式～加曾利B3式	4.8			1								1		I群
116	下水遺跡	44号住居	加曾利B2式	5.7	4.1												I群
117	下水遺跡	45号住居	加曾利B3式	5.1	4.9												I群
118	下水遺跡	47号住居	加曾利B3式～曾谷式	7.9	7.0												Ⅲ群
119	六通貝塚	SI-009	前浦式	5.6	5.1					1							Ⅱ群
120	六通貝塚	SI-012	前浦式	3.5													I群
121	六通貝塚	SI-013	晩期前半	4.6						2		4					I群
122	六通貝塚	SI-014	安行3a式	3.8													I群
123	六通貝塚	SI-016	前浦式														
124	六通貝塚	SI-017	安行1式	4.4	4.1												I群
125	六通貝塚	SI-019	安行1式	3.2	3.1												I群
126	六通貝塚	SI-020	安行1式	3.0													I群
127	六通貝塚	SI-022	安行3a式	5.0	4.0					1							I群
128	六通貝塚	SI-023	曾谷式	4.3	4.3												I群
129	六通貝塚	SI-029	晩期前半	6.4													Ⅱ群
130	六通貝塚	SI-032	安行1式～安行2式	4.0	3.3												I群
131	六通貝塚	SI-044	安行3b式～前浦式	8.1	6.7												Ⅲ群
132	内野第1遺跡	J-1	加曾利B2式	6.1	6.1												Ⅱ群
133	内野第1遺跡	J-3	加曾利B式	3.7	3.1												I群
134	内野第1遺跡	J-13	安行1式	6.1	6.0					2							Ⅱ群
135	内野第1遺跡	J-16	曾谷式～安行3a式	6.4	6.3	2		2									Ⅱ群
136	内野第1遺跡	J-17	加曾利B3式～曾谷式	7.1	6.9				2	3							Ⅱ群
137	内野第1遺跡	J-18	加曾利B3式～曾谷式	6.8	6.4			1									Ⅱ群
138	内野第1遺跡	J-19	曾谷式～安行1式	4.3	3.9					1							I群

表 4 竪穴住居一覧表 (4)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石 剣	独 鈷 石	規模による 分類
139	内野第1遺跡	J-20	安行3a式～安行3b式	6.8	6.1			1	2	7							Ⅱ群
140	内野第1遺跡	J-21	曾谷式～安行1式	6.8	6.1					1							Ⅱ群
141	内野第1遺跡	J-22	安行1式	3.5	3.1												I群
142	内野第1遺跡	J-23	安行1式	4.5	4.5	1				2							I群
143	内野第1遺跡	J-35	安行2式～安行3a式	8.5	8.4	1							1				Ⅲ群
144	内野第1遺跡	J-36	安行2式～安行3a式	5.5	5.0												Ⅱ群
145	内野第1遺跡	J-42	安行2式～安行3a式	7.5	6.6												Ⅱ群
146	内野第1遺跡	J-45	曾谷式～安行1式	8.1	7.9					4							Ⅲ群
147	内野第1遺跡	J-47	加曾利B3式～曾谷式	5.4													Ⅱ群
148	内野第1遺跡	J-48	加曾利B3式～曾谷式	6.3	6.2			2		2							Ⅱ群
149	内野第1遺跡	J-49	加曾利B3式～曾谷式	4.2	3.6			2	1	1							I群
150	内野第1遺跡	J-53	加曾利B3式～曾谷式	7.9	7.9				1								Ⅲ群
151	内野第1遺跡	J-55	曾谷式～安行1式	4.8	4.7	1											I群
152	内野第1遺跡	J-57	加曾利B2式	6.3	6.0										1		Ⅱ群
153	内野第1遺跡	J-58	安行2式～安行3b式	6.2	5.8				1								Ⅱ群
154	内野第1遺跡	J-59	安行2式～安行3b式	8.4	8.3					8					1		Ⅲ群
155	内野第1遺跡	J-61	堀之内2式～加曾利B1式	5.9	5.6												Ⅱ群
156	内野第1遺跡	J-63	堀之内2式～加曾利B1式	6.6		1				1							Ⅱ群
157	内野第1遺跡	J-64	曾谷式	5.7		1				1							Ⅱ群
158	内野第1遺跡	J-74	安行2式	9.5	9.1					12							Ⅳ群
159	内野第1遺跡	J-76	安行2式	7.0	6.2	6		1		6			2				Ⅱ群
160	内野第1遺跡	J-88	加曾利B3式～安行1式	11.0	7.0												Ⅳ群
161	内野第1遺跡	J-89	安行1式～安行3a式	9.2													Ⅳ群
162	内野第1遺跡	J-90	安行1式～安行3a式	18.4	17.9	1				1							Ⅶ群
163	内野第1遺跡	J-92	加曾利B3式～安行2式	7.0	6.9					1							Ⅱ群
164	内野第1遺跡	J-93	加曾利B2式	5.7	5.6					2							Ⅱ群
165	内野第1遺跡	J-94	安行1式	5.5	5.2												Ⅱ群
166	内野第1遺跡	J-95	加曾利B3式～安行1式	7.1	6.8						1						Ⅱ群
167	内野第1遺跡	J-96	堀之内2式～加曾利B1式	6.7													Ⅱ群
168	内野第1遺跡	J-97	後期中葉	6.4						1			1				Ⅱ群
169	内野第1遺跡	J-98	安行3a式	7.7	8.9	2				1							Ⅲ群
170	内野第1遺跡	J-100	安行1式～安行2式	7.4	6.8	1											Ⅲ群
171	内野第1遺跡	J-102	安行3a式	6.9	6.6											1	Ⅱ群
172	内野第1遺跡	J-103	加曾利B3式～曾谷式	4.8	4.6												I群
173	内野第1遺跡	J-104	加曾利B3式～曾谷式	6.0	5.3												Ⅱ群
174	内野第1遺跡	J-106	安行3a式～安行3b式	8.1	6.0												Ⅱ群
175	内野第1遺跡	J-107	後期後葉	5.3	4.9												I群
176	内野第1遺跡	J-108	安行3a式	6.2	5.8												Ⅱ群
177	内野第1遺跡	J-109	曾谷式～安行1式	8.9	7.9												Ⅲ群
178	内野第1遺跡	J-112	後期中葉	5.8	5.5												Ⅱ群
179	内野第1遺跡	J-113	曾谷式	5.8	5.5												Ⅱ群
180	内野第1遺跡	J-114	安行2式	3.6	3.5				1				1				I群
181	内野第1遺跡	J-115	加曾利B3式～曾谷式	6.1	5.5	2			1								Ⅱ群
182	内野第1遺跡	J-116	加曾利B3～安行1式	7.5	7.4												Ⅲ群
183	内野第1遺跡	J-117	後期後葉	6.1	5.9												Ⅱ群
184	内野第1遺跡	J-119	安行2式～安行3a式	3.5	3.2												I群

表5 竪穴住居一覧表(5)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形台付土器	注口土器	釣手土器	ミニチュア土器	土偶	土版	耳飾	手燭形土製品	動物形土製品	石棒・石剣	独鈷石	規模による分類
185	内野第1遺跡	J-120	安行1式～安行2式	14.0	9.4												VI群
186	内野第1遺跡	J-121	曾谷式～安行2式	12.2	11.6					1							VI群
187	内野第1遺跡	J-124	曾谷式～安行3a式	6.1	6.1												II群
188	内野第1遺跡	J-125	安行1式	7.2	6.4				2	7							II群
189	吉見台遺跡	A地点1号住居	安行3b式～前浦式	12.4					1	1	2				2		VII群
190	吉見台遺跡	A地点6号住居	安行3a式～安行3b式	12.0	10.0	1				1					1		V群
191	上宮田台遺跡	SI001	堀之内1式～加曾利B1式	6.1	5.8												II群
192	上宮田台遺跡	SI004AB	加曾利B1式	8.5	7.5												III群
193	上宮田台遺跡	SI006	加曾利B1式	6.0	5.6												II群
194	上宮田台遺跡	SI010	加曾利B3式							1							
195	上宮田台遺跡	SI015AB	加曾利B2式	10.4	9.7												V群
196	上宮田台遺跡	SI016	加曾利B2式	6.5	6.2					1							II群
197	上宮田台遺跡	SI018	安行1式	8.2	7.0												III群
198	上宮田台遺跡	SI019	堀之内2式～加曾利B1式	7.8	7.2												III群
199	上宮田台遺跡	SI031	加曾利B1式	7.1	6.3												II群
200	上宮田台遺跡	SI032	加曾利B2式	8.7						1							IV群
201	上宮田台遺跡	SI033	加曾利B2式	9.2	8.0												III群
202	上宮田台遺跡	SI034	加曾利B2式～加曾利B3式	7.9	7.0												III群
203	上宮田台遺跡	SI035-042	安行3a式	6.4	6.4					2					1		II群
204	上宮田台遺跡	SI036	安行3c式	6.6	6.3												II群
205	上宮田台遺跡	SI039	安行2式	6.2	5.4												II群
206	上宮田台遺跡	SI043	安行1式	5.5	5.2					1							II群
207	上宮田台遺跡	SI045	安行2式	4.2	4.2												I群
208	上宮田台遺跡	SI046	晩期中葉	7.4	7.0				2	1					2		III群
209	上宮田台遺跡	SI051AB	加曾利B2式～加曾利B3式	8.1	7.4												III群
210	上宮田台遺跡	SI052	安行2式	7.8	6.6							1					III群
211	上宮田台遺跡	SI054	加曾利B3式														
212	上宮田台遺跡	SI056	前浦式	6.2	5.8												II群
213	上宮田台遺跡	SI057	安行1式	7.2	6.5										1		II群
214	上宮田台遺跡	SI058	安行3b式～安行3c式	7.2	6.5												II群
215	上宮田台遺跡	SI060	加曾利B1式	6.6	6.2												II群
216	上宮田台遺跡	SI061	安行3a式～安行3b式	7.6	7.2	4	1	1				1			3		III群
217	上宮田台遺跡	SI063	安行3b式～安行3c式	7.3	6.4				1		1						II群
218	上宮田台遺跡	SI066	安行3b式～安行3c式	6.8	5.9												II群
219	上宮田台遺跡	SI067AB	安行3b式	6.8	6.1												II群
220	上宮田台遺跡	SI068	安行3b式～安行3c式	5.6	4.9												II群
221	上宮田台遺跡	SI070	晩期中葉	7.1	6.3												II群
222	上宮田台遺跡	SI074	加曾利B1式	7.4	6.2			1	1	1							II群
223	上宮田台遺跡	SI075	晩期中葉	4.0	4.0												I群
224	上宮田台遺跡	SI081	安行1式	6.3	6.1												II群
225	上宮田台遺跡	SI082	晩期中葉	4.9	4.6												I群
226	上宮田台遺跡	SI083	晩期中葉	6.0	5.1												II群
227	上宮田台遺跡	SI084	加曾利B2式～加曾利B3式	6.8	6.2												II群
228	上宮田台遺跡	SI085	加曾利B2式	8.0	7.5												III群
229	上宮田台遺跡	SI089	安行3b式	5.8	5.0												II群
230	上宮田台遺跡	SI201	加曾利B3式～安行1式	11.1	10.5				2								V群

表 6 竪穴住居一覧表 (6)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石 剣	独 鈷 石	規模による 分類
231	上宮田台遺跡	SI202	曾谷式	9.0	8.5												IV群
232	上宮田台遺跡	SI203	安行1式~安行2式	7.3	6.0												II群
233	上宮田台遺跡	SI204	加曾利B1式	9.9	8.4												IV群
234	上宮田台遺跡	SI207	加曾利B2式	8.7	7.6												III群
235	上宮田台遺跡	SI212	加曾利B3式	8.3	7.1					1							III群
236	上宮田台遺跡	SI213	安行1式	6.1	5.4												II群
237	上宮田台遺跡	SI214	加曾利B2式~加曾利B3式	8.0	7.1					2		2			2		III群
238	馬場遺跡	2号住居	安行2~3a式	5.0	4.3	2	1		2	4		15	1		3		I群
239	馬場遺跡	6号住居	安行3a~安行3b式	6.4					1	4	3				4		II群
240	馬場遺跡	8号住居	加曾利B3~曾谷式			1											
241	馬場遺跡	10号住居	加曾利B3式	9.6			1	3	3	4					1		IV群
242	馬場遺跡	11号住居	加曾利B3~曾谷式	11.7		3	12	12	18	45	5	4	3	2	8		VI群
243	馬場遺跡	14号住居	安行3b~前浦式	5.8	5.6		1	1	4						1	1	II群
244	馬場遺跡	15号住居	加曾利B3式	3.4											1		I群
245	馬場遺跡	20号住居	加曾利B3式									1			1		
246	鹿島台遺跡	DSI-001	安行1式	6.1	5.2	1				1					1		II群
247	鹿島台遺跡	DSI-003	加曾利B3式	3.4	3.3												I群
248	鹿島台遺跡	DSI-018	加曾利B3式	16.7	16.0		2	3				1			2		VII群
249	鹿島台遺跡	DSI-039	加曾利B3式	4.7	4.5				1								I群
250	鹿島台遺跡	DSI-041	曾谷式~安行1式	9.5	9.0												IV群
251	鹿島台遺跡	DSI-059	加曾利B3式	3.4	3.2												I群
252	鹿島台遺跡	DSI-069	安行1式	9.7	8.2												IV群
253	寺野東遺跡	SI081	曾谷式	6.4	4.9					2					1		II群
254	寺野東遺跡	SI082	加曾利B1式	4.5	4.2												I群
255	寺野東遺跡	SI099	曾谷式	4.0	3.2												I群
256	寺野東遺跡	SI135	曾谷式~安行1式	8.1	7.5										1		III群
257	寺野東遺跡	SI166・167	曾谷式~安行1式	7.1	6.9												II群
258	寺野東遺跡	SI176	曾谷式~安行1式	5.8	5.5										1		II群
259	寺野東遺跡	SI232	加曾利B3式	5.1	5.0												I群
260	藤岡神社遺跡	S38・39	安行3c式	6.0	5.6				1	1	1	12			1	2	II群
261	藤岡神社遺跡	S322	安行2式												1		
262	藤岡神社遺跡	S323	安行1式	9.2					1		1	2			2		IV群
263	藤岡神社遺跡	S325	安行1式~安行2式	4.4	4.5							1					I群
264	藤岡神社遺跡	S345	安行1式~安行2式	5.4	-	1											II群
265	藤岡神社遺跡	S370	加曾利B2式~加曾利B3式	6.2	4.6				2			2					II群
266	藤岡神社遺跡	S371	安行3a式~安行3b式								1	1			1		
267	藤岡神社遺跡	S490	安行1式	6.5	6.0							1					II群
268	藤岡神社遺跡	S510	加曾利B3式~曾谷式	7.0	6.2						1						II群
269	藤岡神社遺跡	S622A	安行2式	5.1	5.0							3	1				I群
270	藤岡神社遺跡	S622D	安行2式	6.6	5.0										1		II群
271	藤岡神社遺跡	S622G	曾谷式~安行1式							1		1			1		
272	藤岡神社遺跡	S623	曾谷式~安行1式	6.0	5.9				1			1			1		II群
273	藤岡神社遺跡	S933	安行1式	5.6	5.6				1			1					II群
274	藤岡神社遺跡	S946	安行2式	10.4	10.0	1				4	1	19		1	1	1	V群
275	藤岡神社遺跡	S949a	安行1式~安行2式	4.6	3.2								2				I群
276	藤岡神社遺跡	S950	加曾利B1式														

表7 竪穴住居一覧表(7)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石剣	独 鈎 石	規模による 分類
277	藤岡神社遺跡	S970	安行1式	6.6	6.4				1	1		4					Ⅱ群
278	藤岡神社遺跡	S971	安行2式	7.1	7.2				4	2		10					Ⅲ群
279	藤岡神社遺跡	S972	安行1式	5.7	5.6												Ⅱ群
280	藤岡神社遺跡	S975	安行1式～安行2式						1			1					
281	藤岡神社遺跡	S980	安行1式～安行2式	9.0	8.6	1				3		4					Ⅳ群
282	藤岡神社遺跡	S983	安行1式	4.4	4.2												Ⅰ群
283	藤岡神社遺跡	S986	安行1式	9.4	9.4												Ⅳ群
284	藤岡神社遺跡	S988	安行1式														
285	藤岡神社遺跡	S1085	安行1式														
286	藤岡神社遺跡	S1175	安行2式	6.0	5.4				1	1		1				1	Ⅱ群
287	藤岡神社遺跡	S1200	安行2式	6.8	6.5				4	1	1	16			1		Ⅱ群
288	藤岡神社遺跡	S1201	安行1式	7.0					1			2					Ⅱ群
289	藤岡神社遺跡	S1259	安行2式														
290	乙女不動原北浦遺跡	J1号住居	安行1式	6.4	5.4					2							Ⅱ群
291	乙女不動原北浦遺跡	J2号住居	加曾利B2式	8.0	7.5												Ⅲ群
292	乙女不動原北浦遺跡	J3号住居	安行1式				1										
293	乙女不動原北浦遺跡	J4号住居	安行1式～安行2式	7.6	7.1							3					Ⅲ群
294	乙女不動原北浦遺跡	J7号住居	安行1式～安行2式	10.0	7.0		1			1		13					Ⅲ群
295	乙女不動原北浦遺跡	J8号住居	安行2式～安行3a式	6.5	5.4		1					2					Ⅱ群
296	乙女不動原北浦遺跡	J9号住居	安行3d式	9.9					4	1		2			3		Ⅴ群
297	乙女不動原北浦遺跡	J10号住居	安行3c式～安行3d式	7.4						1		2					Ⅲ群
298	乙女不動原北浦遺跡	J12号住居	安行1式～安行2式	6.8			1		3			5			1	1	Ⅱ群
299	高井東遺跡	1号住居	安行1式	6.6	5.5					1		10					Ⅱ群
300	高井東遺跡	2号住居	加曾利B2式	6.4	6.2										1		Ⅱ群
301	高井東遺跡	3号住居	安行3a式～安行3b式	9.5	6.8						2	3					Ⅲ群
302	高井東遺跡	5号住居	加曾利B2式	7.3	7.1							1			2		Ⅲ群
303	高井東遺跡	6号住居		11.8	10.5												Ⅵ群
304	高井東遺跡	7号住居	加曾利B1式	6.6	5.8	2						2			3		Ⅱ群
305	高井東遺跡	8号住居	安行2式～安行3b式	9.2	8.9				3	2	4	30		1	3		Ⅳ群
306	高井東遺跡	10A・B号住居	安行3a式	5.2	5.2					3	2	17			4		Ⅱ群
307	高井東遺跡	11号住居	加曾利B1式														
308	高井東遺跡	12号住居	安行1式～安行3a式	6.6	6.0							1			1		Ⅱ群
309	高井東遺跡	13号住居	安行1式～安行3a式	5.9	5.8					1		11			5		Ⅱ群
310	高井東遺跡	14号住居	加曾利B2式	7.4	7.4		1	1									Ⅲ群
311	高井東遺跡	15・16号住居	加曾利B1式～加曾利B3式			2				1							
312	高井東遺跡	17A・B号住居	加曾利B3式～安行2式	5.1	4.8					1		22					Ⅰ群
313	高井東遺跡	19号住居	加曾利B1式									1					
314	高井東遺跡	20号住居	安行1式	6.6	6.2					1		1					Ⅱ群
315	高井東遺跡	21号住居	加曾利B3式	8.6	8.6	1				1		7			1		Ⅲ群
316	高井東遺跡	22号住居	加曾利B2式	5.3	4.3												Ⅰ群
317	高井東遺跡	23号住居	加曾利B2式	6.1	5.4			1		1							Ⅱ群
318	高井東遺跡	25号住居	加曾利B1式～加曾利B2式	6.6	5.2							1					Ⅱ群
319	高井東遺跡	27号住居	加曾利B2式～加曾利B3式	7.6	6.6	1									2		Ⅱ群
320	高井東遺跡	30号住居	加曾利B3式	5.4	4.6												Ⅰ群
321	奈良瀬戸遺跡	2号住居	安行3c式	4.4	3.5		1										Ⅰ群
322	奈良瀬戸遺跡	3号住居	安行3c式～安行3d式	6.0	5.2										2	1	Ⅱ群

表 8 竪穴住居一覧表 (8)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石 剣	独 鈷 石	規模による 分類
323	南方遺跡	6号住居	加曾利B1式~加曾利B2式	5.3	5.2							2					Ⅱ群
324	南方遺跡	8号住居	加曾利B1式~加曾利B3式	6.1			1			1		2					Ⅱ群
325	石神貝塚	12次1号住居	安行3a式~安行3c式	5.5	5.5				1			2					Ⅱ群
326	石神貝塚	13次1号住居	安行3c式	9.6								1					Ⅳ群
327	石神貝塚	13次2号住居	安行3b式~安行3c式														
328	中野遺跡	1号住居	安行3a式~安行3b式	3.9	3.5												Ⅰ群
329	中野遺跡	2号住居	安行3b式	4.3	4.2		2								1		Ⅰ群
330	ささら(Ⅱ)遺跡	1号住居	安行1式	4.0	3.5	1	1										Ⅰ群
331	諏訪木遺跡	D区1号住居	安行3a式~安行3b式	6.3	5.0		2		2	2		12			2	1	Ⅱ群
332	諏訪木遺跡	D区2号住居	安行2式~安行3a式	7.5	5.5	2	11		2			14			5		Ⅱ群
333	諏訪木遺跡	D区3号住居	安行3a式	4.1	3.0												Ⅰ群
334	諏訪木遺跡	D区4号住居	安行1式~安行2式	6.0								1					Ⅱ群
335	諏訪木遺跡	D区5号住居	後期後葉~晩期前葉	6.9	5.4												Ⅱ群
336	諏訪木遺跡	D区8号住居	安行1式~安行2式	5.3	5.2		3		1			2					Ⅱ群
337	諏訪木遺跡	D区10号住居	安行1式~安行2式						1	1	1						
338	諏訪木遺跡	D区11号住居	安行3a式~安行3b式	4.6	4.5				2			1				1	Ⅰ群
339	諏訪木遺跡	D区12号住居	安行3a式	6.5			2		1			6					Ⅱ群
340	諏訪木遺跡	F区11号住居	安行3a式~安行3b式							1		1					
341	諏訪木遺跡	F区12・13号住居	安行3a式							3		4					
342	諏訪木遺跡	F区14号住居	安行3a式						1			5					
343	久台遺跡	4号住居	安行3a式	6.1	5.7									1			Ⅱ群
344	久台遺跡	5号住居	安行3c式	4.3	4.0		1										Ⅰ群
345	久台遺跡	6号住居	後期後葉~晩期前葉	5.7	5.0												Ⅱ群
346	久台遺跡	10号住居	安行1式~安行2式	5.3	5.0							2					Ⅰ群
347	赤城遺跡	1号住居	加曾利B1式														
348	赤城遺跡	2号住居	加曾利B2式	7.5	7.1												Ⅲ群
349	赤城遺跡	6号住居	加曾利B3式	5.9	5.0												Ⅱ群
350	赤城遺跡	7号住居	加曾利B2式	5.6	4.8												Ⅱ群
351	赤城遺跡	8号住居	加曾利B1式~加曾利B2式	6.2	6.2												Ⅱ群
352	赤城遺跡	9号住居	曾谷式	6.2													Ⅱ群
353	赤城遺跡	10号住居	加曾利B1式~加曾利B2式				1										
354	赤城遺跡	11号住居	加曾利B1式~加曾利B2式														
355	赤城遺跡	12号住居	加曾利B2式	7.2	7.1	1		1		2							Ⅲ群
356	赤城遺跡	13号住居	加曾利B1式	4.4	4.1												Ⅰ群
357	東北原遺跡	2号住居	安行3a式~安行3b式	7.4	6.6				2		6	8		1	2		Ⅱ群
358	東北原遺跡	3号住居	安行3a式	5.9	5.7				4		4	2			4	1	Ⅱ群
359	東北原遺跡	5号住居	安行2式									3					
360	東北原遺跡	6号住居	安行3a式	4.8	4.4							2			1		Ⅰ群
361	上境旭台貝塚	1号住居	加曾利B式	5.9													Ⅱ群
362	上境旭台貝塚	2B号住居	安行2式														
363	上境旭台貝塚	3号住居	前浦式	9.1	6.9		1		2	2	2				1		Ⅲ群
364	上境旭台貝塚	4号住居	前浦式	9.1	8.7				1	1	1						Ⅳ群
365	上境旭台貝塚	5号住居	加曾利B3式~安行1式	8.0					1								Ⅲ群
366	上境旭台貝塚	8号住居	安行3a式	3.9						2							Ⅰ群
367	上境旭台貝塚	12号住居	安行1式~安行2式	4.6	4.0	1				1		1					Ⅰ群
368	上境旭台貝塚	16号住居	曾谷式~安行1式	7.0	5.0												Ⅱ群

表9 竪穴住居一覧表(9)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	長軸 (m)	短軸 (m)	異形 台付土器	注口 土器	釣手 土器	ミニ チュア 土器	土 偶	土 版	耳 飾	手 燭形 土製 品	動 物形 土製 品	石 棒・ 石 剣	独 鈎 石	規模による 分類
369	上境旭台貝塚	17A号住居	曾谷式～安行1式	5.7	4.8												Ⅱ群
370	上境旭台貝塚	17B号住居	曾谷式～安行1式	5.7	4.8					1		1					Ⅱ群
371	上境旭台貝塚	18号住居	安行2式	5.5			2			1					1		Ⅱ群
372	上境旭台貝塚	19A・B・C号住居	安行1式～安行2式	7.3	5.5				1			2					Ⅱ群
373	前田村遺跡	430号住居	安行2式	4.3	4.1							1					I群
374	前田村遺跡	463号住居	安行2式	11.1	7.5					1							Ⅳ群
375	前田村遺跡	464A号住居	安行3a式～安行3b式	10.8	9.4							14			1		V群
376	前田村遺跡	464B号住居	安行3a式	11.4	8.0	1				1							Ⅳ群
377	前田村遺跡	475号住居	加曾利B1式	5.5	5.2												Ⅱ群
378	本田遺跡	2号住居	安行3b式～安行3c式	7.0	-				1								Ⅱ群
379	本田遺跡	4号住居	曾谷式～安行1式	8.0	7.5	1				2		3			1		Ⅲ群
380	本田遺跡	5・6・10号住居	曾谷式～安行2式	6.0	6.0						1						Ⅱ群
381	本田遺跡	8号住居	安行1式	4.0	3.0												I群
382	本田遺跡	11号住居	曾谷式～安行1式	6.0	6.0				2								Ⅱ群
383	本田遺跡	12号住居	曾谷式～安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
384	本田遺跡	13・22・23号住居	曾谷式～安行1式	7.2	5.6					2					1		Ⅱ群
385	本田遺跡	14号住居	安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
386	本田遺跡	15号住居	安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
387	本田遺跡	16号住居	曾谷式～安行1式	6.0	6.0		1								1		Ⅱ群
388	本田遺跡	17A・B号住居	安行1式～安行2式	7.5	7.4	1			3								Ⅲ群
389	本田遺跡	18号住居	安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
390	本田遺跡	19A・B号住居	曾谷式～安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
391	本田遺跡	20号住居	曾谷式～安行1式	6.0	6.0												Ⅱ群
392	本田遺跡	25号住居	安行2式	-	-	1											
393	本田遺跡	26号住居	安行1式	-	-												
394	本田遺跡	29号住居	安行3b式～安行3d式	5.0	5.0		1					1					I群
395	石畑遺跡	1号住居	安行2式～安行3a式	8.6	6.0	1				1		7					Ⅲ群
396	石畑遺跡	2号住居	安行1式～安行2式	10.1	9.7					1		2					Ⅳ群
397	石畑遺跡	15号住居	安行3b式～安行3c式	8.8	8.6					2	3	4			6	1	Ⅳ群
398	釈迦才仏遺跡	6号住居	安行1式	4.9	4.9												I群
399	釈迦才仏遺跡	9号住居	加曾利B3式～安行1式	5.7	4.0							1					I群
400	釈迦才仏遺跡	10号住居	安行1式	5.3	3.1	1											I群
401	釈迦才仏遺跡	12号住居	安行3c式	-	-												
402	釈迦才仏遺跡	14号住居	安行2式	-	-	1											
403	釈迦才仏遺跡	15A号住居	安行3a式～安行3c式	4.3	3.9		1			1		3	7	2	1		I群
404	釈迦才仏遺跡	18号住居	安行2式	6.0	5.6				2			5					Ⅱ群
405	釈迦才仏遺跡	21号住居	安行3b式	6.1	6.0				2			6			1		Ⅱ群
406	釈迦才仏遺跡	31号住居	安行1式	-	-							1					

平均±標準偏差の範囲(0点～11点)に全竪穴住居の約92%が収斂することになる。また、中央値は1なので、ほとんどの住居では儀礼関連遺物は全く出土しないか、出土してもごくわずかであるといえる。

その一方で、112点が出土している千葉県印西市馬場遺跡11号住居、66点が出土している千葉県君津市三直貝塚SI-004Bのように大きく逸脱した例も

みられる。第3図では上記2例について出土点数の分散が不連続的であることがわかる。竪穴住居が埋没する過程で流入したのものとしては、出土点数の不均衡は不自然なのではないだろうか。

竪穴住居跡では儀礼関連遺物はほとんど出土しないか、出土してもごくわずかというのが一般的な傾向であり、儀礼関連遺物の出土は特殊な現象と考えてよい

出土点数	住居数
0	186
1～5	152
6～10	34
11～15	13
16～20	8
21～25	5
26～30	3
31～35	1
36～40	0
41～45	1
46～50	1
51～55	0
56～60	0
61～65	1
66～70	0
71～75	0
76～80	0
81～85	0
86～90	0
91～95	0
96～100	0
101～105	0
106～110	0
111～115	1
総計	406

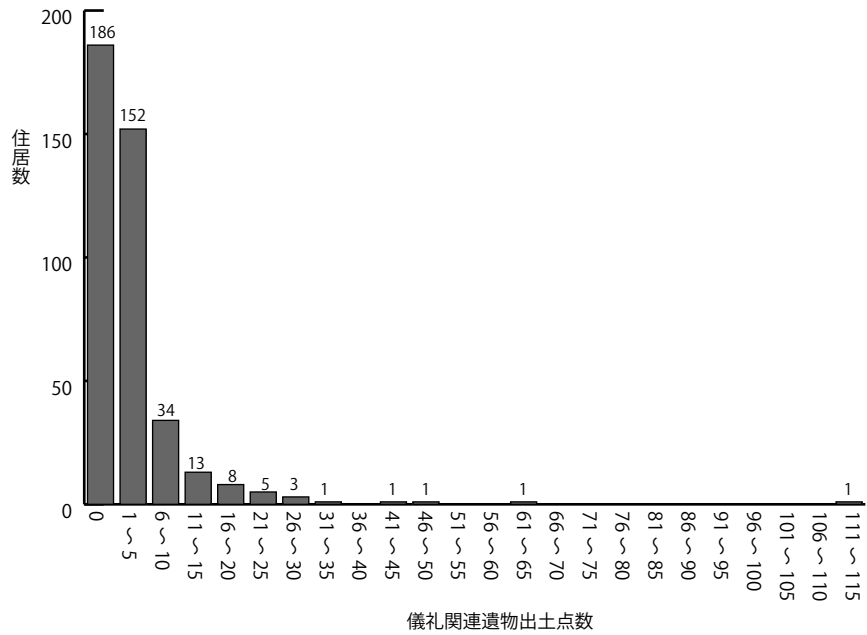


図3 儀礼関連遺物出土量度数分布

だろう。

とりわけ馬場遺跡 11 号住居のように儀礼関連遺物の出土量が突出して多い住居については——それが儀礼行為であるかどうかは別の問題としても——人間の意図的な行為の痕跡であると理解してよいだろう。逆に儀礼関連遺物がごくわずかしかな出土していない住居については流入の可能性を考慮すべきかもしれない。

以上の理由から、竪穴住居跡で出土する儀礼関連遺物は意図的な行為の結果と考えられる。しかしながら、流入の可能性が完全に否定されるものではない。住居内での出土量がごくわずかな場合には流入の可能性を考慮しなければならないし、出土量が突出して多い場合には意図的な行為の痕跡であることはほぼ確実であろう。また、1つの住居内で両者が混在している可能性も考えられるが、両者を弁別することは極めて困難である。

全てではないにせよ意図的な行為によるものが含まれることは確実なので、竪穴住居跡における儀礼関連遺物の出土を人間の意図的な行為の結果とみなすことには作業仮説として一定の有効性があると言って差し支えないだろう。

では、住居内に儀礼関連遺物を残す意図的な行為とはどのような行為だろうか。中村耕作氏によれば住居廃絶時に遺物を住居内に遺棄する行為は住居廃絶儀礼ととらえられる（中村 2013a ほか）。なかんずく遺棄される遺物が儀礼的性格を帯びるものとなれば、儀礼行為である蓋然性は高い。したがって本稿では竪穴住

居跡で出土する儀礼関連遺物を何らかの儀礼行為の痕跡と判断する。

2.3. 儀礼関連遺物の変遷

2.3.1. 検討項目

竪穴住居における儀礼関連遺物のあり方が時期によってどのように変化するのかを分析する。

検討するのは以下の3項目である。

- ①儀礼関連遺物出土率
- ②儀礼関連遺物出土量
- ③器種数

①の儀礼関連遺物出土率は、ある時期に帰属する竪穴住居跡のうち、儀礼関連遺物が出土する竪穴住居跡の割合である。

②の儀礼関連遺物出土量は、ある時期に帰属する竪穴住居跡 1 例あたりの儀礼関連遺物出土点数である。全器種を合計した場合とともに、各器種の平均出土量についても合わせて検討する。

③の器種数は、ある時期に帰属する竪穴住居跡 1 例あたり何種類の儀礼関連遺物が出土しているのかを検討する。

なお、時期ごとにデータを集計するにあたり、複数の土器型式にまたがって営まれたと考えられる竪穴住居（帰属時期を単一土器型式に絞り込めない竪穴住居）はそれぞれの時期に帰属するものと考えた。例

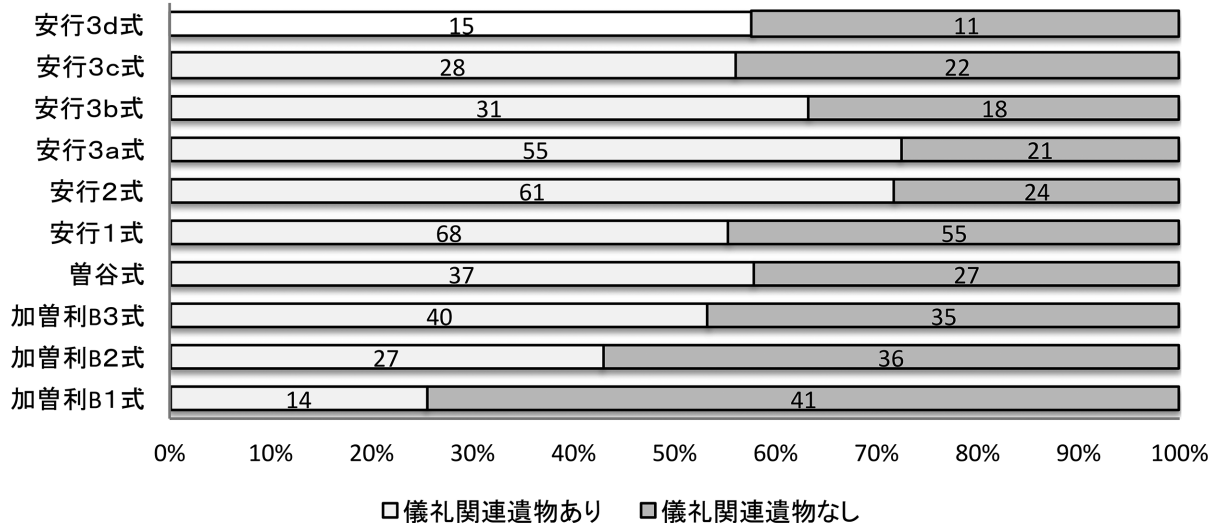


図4 儀礼関連遺物出土率の変遷

例えば、加曾利 B 2 式期～加曾利 B 3 式期の住居は加曾利 B 2 式期、加曾利 B 3 式期の両方でカウントしている。したがって、各時期の住居数を合計した場合に抽出した 406 例を超過することになる。

2.3.2. 儀礼関連遺物出土率の変遷

儀礼関連遺物出土率の変遷を分析する。全体では儀礼関連遺物が出土する竪穴住居跡は 406 例中 186 例で約 45% になる。

図 4 で各時期の儀礼関連遺物出土率を示した。儀礼関連遺物出土率が最も高いのは晩期初頭の安行 3 a 式期で、76 例中 55 例（約 72%）の竪穴住居跡で儀礼関連遺物が出土している。儀礼関連遺物出土率が最も低いのは後期中葉の加曾利 B 1 式期で、儀礼関連遺物の出土は 55 例中 14 例（約 25%）にとどまる。

時期が新しくなるにつれて儀礼関連遺物出土率が高くなる傾向にあり、後期末～晩期初頭、安行 2 式期～安行 3 a 式期にかけてピークに至り、晩期中葉にはやや低調になる。

2.3.3. 儀礼関連遺物出土量の変遷

儀礼関連遺物出土量の変遷を分析する。図 5、図 6 に時期ごとの平均出土量の変遷を示した。

図 5-1 は各時期において儀礼関連遺物として抽出した 11 器種全ての出土量を合計し、住居あたりの出土量とその変遷を示している。ここでは個体数を集計している。土偶や耳飾のように多量に出土する遺物もあれば、独鈷石のようにごくわずかな出土例しか確認されていない器種もあり、それらを十把一絡げに扱うことには問題があるかもしれないが、儀礼行為総体と

しての大まかな変遷を把握するために検討した。

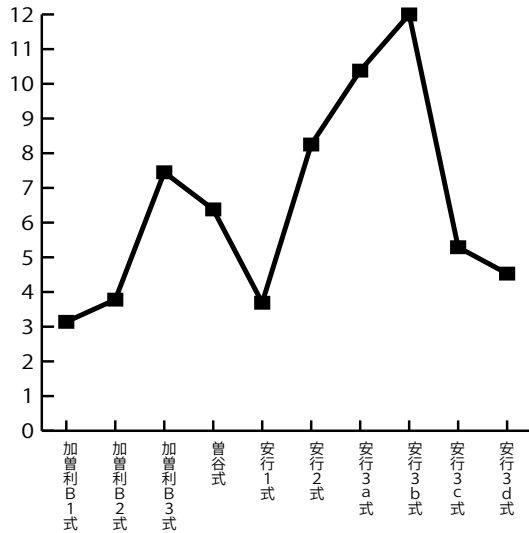
図 5-1 では加曾利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期～安行 3 b 式期に儀礼関連遺物の出土量が増加していることがわかる。2つの時期の間にあたる安行 1 式期には儀礼関連遺物の出土量が大きく減少している点も特徴的である。

図 5-2～6、図 6-7～12 では各器種の出土量の変遷を示した。ただし、手燭形土製品、動物形土製品、独鈷石については特に資料数が少なく、変遷を検討するには不十分かもしれない。

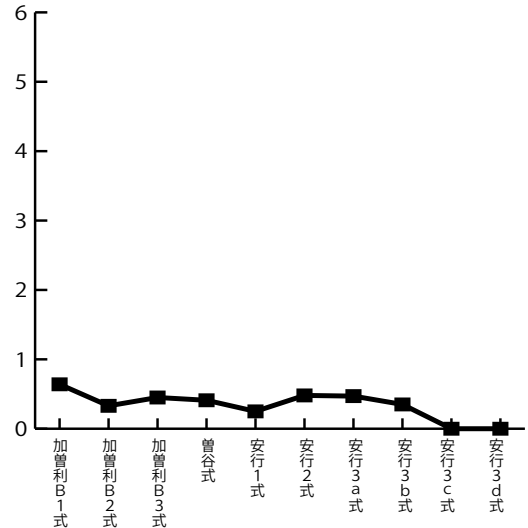
異形台付土器は出土量がそれほど大きく変化しない（図 5-2）。異形台付土器の出現は加曾利 B 2 式期とされているにもかかわらず（内田 1978、1984）、加曾利 B 1 式期の住居からの出土量がやや多いようである。加曾利 B 1 式期の住居である埼玉県桶川市高井東遺跡 7 号住居では 2 個体の異形台付土器が出土しているが、いずれも曾谷式のものであり住居とは時期が異なる（図 7）。晩期中葉には異形台付土器はみられなくなるが、異形台付土器は晩期前葉までで終焉を迎えんとする従来の編年観（蜂屋 2008）に合致している。

注口土器は各時期を通じて出土しており出土量の変化も小さいが（図 5-3）、加曾利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期～安行 3 a 式期にやや出土量が多い点は全体的な傾向と一致している。

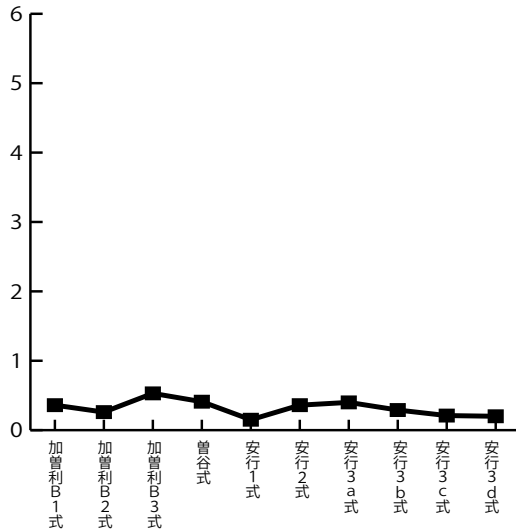
釣手土器は加曾利 B 2 式期～曾谷式期に突出して出土量が多い（図 5-4）。関東地方の釣手土器は加曾利 B 2 式期に出現し、ほぼ後期の範囲で姿を消すことが指摘されている（中村 2008；蜂屋 2004、2013）。竪穴住居跡における釣手土器の消長は従来の編年観と矛盾しない。



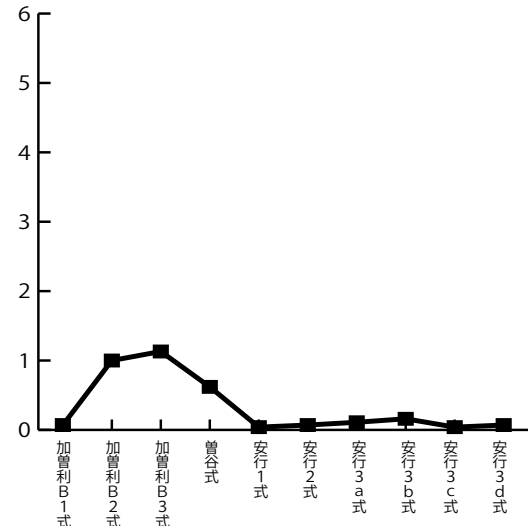
1. 儀礼関連遺物（全器種）出土点数の変遷



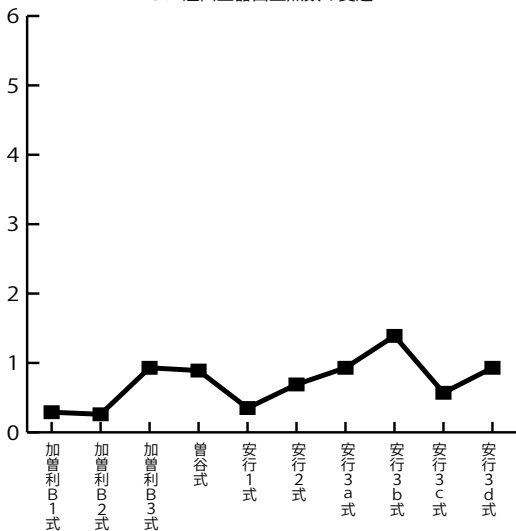
2. 異形台付土器出土点数の変遷



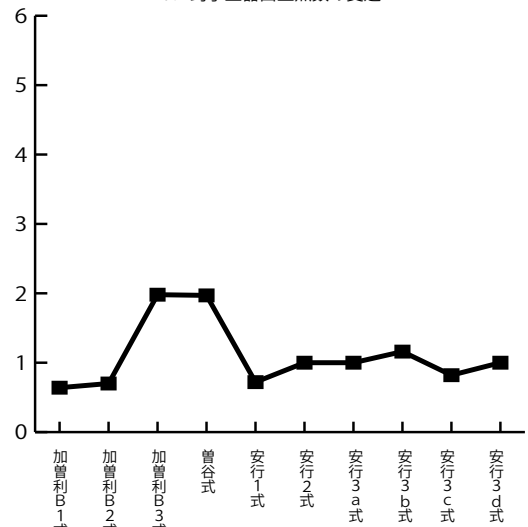
3. 注口土器出土点数の変遷



4. 釣手土器出土点数の変遷

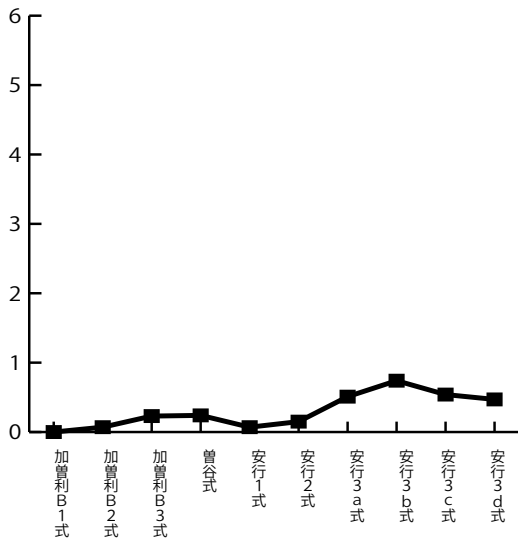


5. ミニチュア土器出土点数の変遷

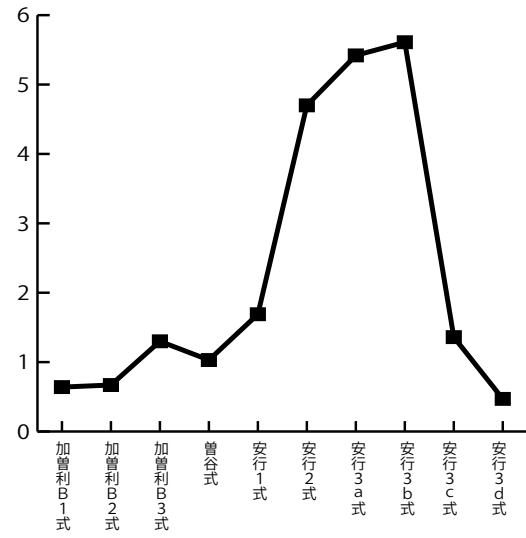


6. 土偶出土点数の変遷

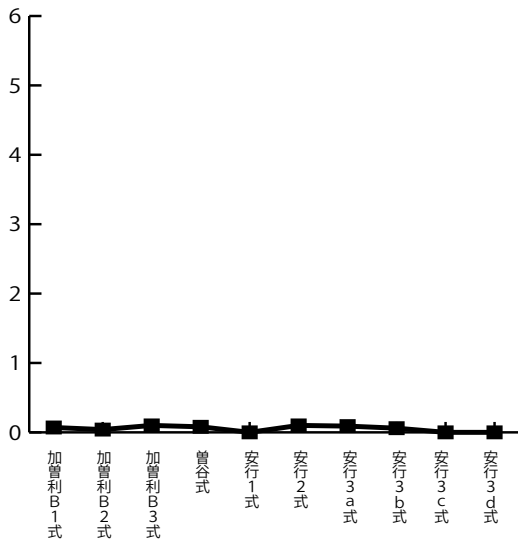
図 5 住居 1 軒あたりの儀礼関連遺物出土点数の変遷 (1)



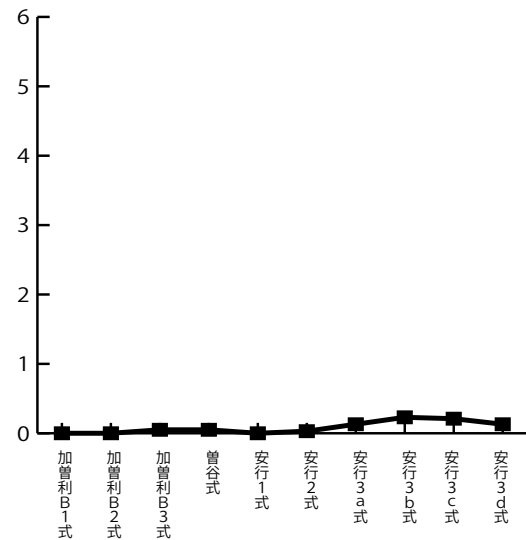
7. 土版出土点数の変遷



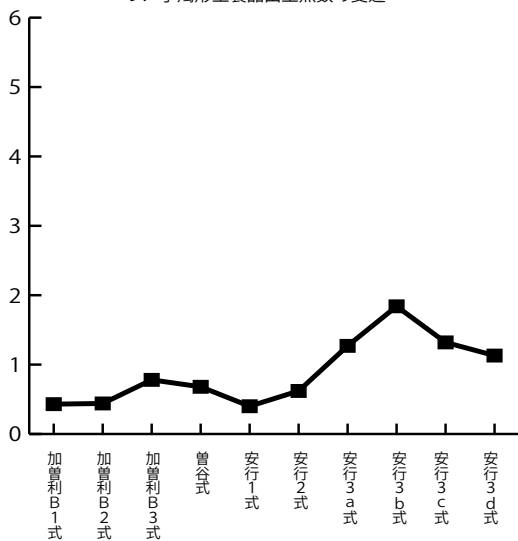
8. 耳飾出土点数の変遷



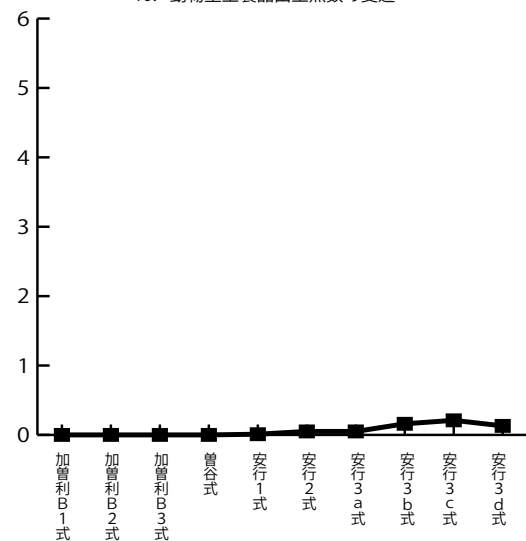
9. 手燭形土製品出土点数の変遷



10. 動物型土製品出土点数の変遷



11. 石棒・石剣土製品出土点数の変遷



12. 独鈷石出土点数の変遷

図6 住居1軒あたりの儀礼関連遺物出土点数の変遷(2)

ミニチュア土器は加曽利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期以降に比較的出土量が多い（図 5-5）。概ね全体の傾向に一致しているが、晩期中葉にいたっても安行 3 d 式期には再び増加に転じているという点はやや様相を異にする。

土偶は後期・晩期を通じて比較的出土量の多い遺物である。特に加曽利 B 3 式期～曾谷式期に突出して出土量が多くなる（図 5-6）。加曽利 B 3 式期～曾谷式期に出土量が増加する点は全体の傾向に一致するが、もう一つのピークである後期末～晩期前葉の時期には増加の傾向はみられない。加曽利 B 3 式期～曾谷式期に平均出土量が大きく増加する要因として馬場遺跡 11 号住居の存在があげられよう。馬場遺跡 11 号住居は出土土器に基いて加曽利 B 3 式期～曾谷式期に比定されるが、出土した土偶は 45 点を数える。

土版の出土量はそれほど多くはないが、加曽利 B 3 式期～曾谷式期に微増、晩期以降に増加する傾向にある（図 6-7）。関東地方の土版は、編年的には晩期の安行 3 b 式期～安行 3 c 式期を中心とした時期の遺物であるから（鷹野 1977）、加曽利 B 3 式期～曾谷式期の住居から出土する土版は住居の時期とは時期が異なる可能性が高い。

耳飾は各時期にみられるが、安行 2 式期～安行 3 b 式期に爆発的に増加する（図 6-8）。設楽博己氏は安行 2 式期に耳飾が大形化、多様化し出土量も急増することを指摘しており（設楽 1983）、竪穴住居における状況と一致している。耳飾は他器種と比較して出土個体数が多いが、後期末～晩期前葉には特に量が多く、この時期に儀礼関連遺物の出土量が増加する傾向の主要因となっている。一方、もう一つのピークである加曽利 B 3 式期～曾谷式期にはそれほど多く出土しているわけではない。土偶の場合と対照的である。

手燭形土製品の出土例はごくわずかであり、加曽利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期～安行 3 b 式期に若干みられる（図 6-9）。わずかな出土例で変遷の傾向を論じることには問題もあろうが、儀礼関連遺物全体の傾向に概ね一致していると考えていだろう。手燭形土製品の出現は早くとも安行 1 式期とされており（蜂屋 2006、2007、2012）、加曽利 B 3 式期～曾谷式期の住居跡からの出土例は住居の時期よりも新しい遺物である可能性が高い。

動物形土製品は手燭形土製品同様に極めて出土量が少ないが、晩期にしかみられないという点を指摘することができよう（図 6-10）。

石棒・石剣は安定的に出土するが加曽利 B 3 式期～曾谷式期、晩期に出土量が増加する傾向にある（図 6

ー 11）。全体的な傾向と一致していると考えていだろう。

独鈷石は出土例が極めて少ないが、竪穴住居跡での出土例は晩期に限られる（図 6-12）。動物形土製品と同様の傾向を示している。

全体的な傾向としては加曽利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期～安行 3 b 式期という 2 つの時期にピークがあるようである。器種ごとにみるとそれぞれ異なる傾向を示すが、増加傾向をみせる時期は概ね全体的な傾向と一致するようである。加曽利 B 3 式期～曾谷式期をピーク 1、安行 2 式期～安行 3 b 式期をピーク 2 とした場合、ピーク 1 で顕著な器種、ピーク 2 で顕著な器種、ピーク 1・2 両方で増加傾向をみせる器種という 3 パターンに分類することができるだろう。

ピーク 1 で顕著な器種としては釣手土器、土偶があげられる。

ピーク 2 で顕著な器種としては耳飾、動物形土製品、独鈷石があげられる。ただし、動物形土製品と独鈷石は出土量が極めて少ないため注意が必要である。

ピーク 1・2 両方で増加傾向をみせる器種としては異形台付土器、注口土器、ミニチュア土器、土版、手燭形土製品、石棒・石剣がある。ただし、手燭形土製品については出土量が極めて少ないため注意が必要である。

以上のように竪穴住居跡における儀礼関連遺物の出土量は器種ごとに差はあるものの加曽利 B 3 式期～曾谷式期、安行 2 式期～安行 3 b 式期という 2 つの時期に増加傾向をみせるということが認められる。

2.3.4. 器種数の変遷

図 8 に各時期の竪穴住居跡で出土した儀礼関連遺物の平均器種数とその変遷を示した。

全体的に後期よりも晩期の方が多様な器種が出土していることがわかる。後期では加曽利 B 3 式期、晩期では安行 3 b 式期にピークがあるが、特に安行 3 b 式期では平均 3.5 種の儀礼関連遺物が出土しており、分析対象とした時期の中では最も器種が豊富である。図 6 で示したように、手燭形土製品、動物形土製品、独鈷石といった後期にはほとんどみられなかった器種が出土するようになったことで、晩期には平均器種数が増加したものと考えられる。

2.3.5. 各時期の様相

以上の分析により明らかになった各時期の竪穴住居における儀礼関連遺物の状況をまとめる。

加曽利 B 1 式期～加曽利 B 2 式期は儀礼関連遺物

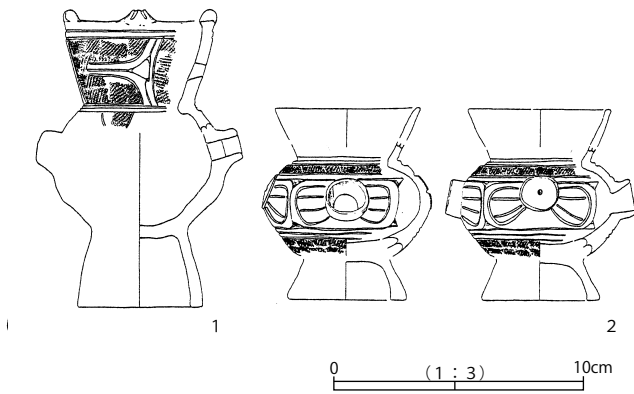


図7 高井東遺跡7号住居出土異形台付土器

の出土率が低く、出土量も少ない。加曽利B2式期には釣手土器が増加する。平均器種数も対象とした時期を通じて最も小さい。竪穴住居における儀礼関連遺物が低調な時期と考えるとよいだろう。

加曽利B3式期～曾谷式期には儀礼関連遺物の出土率が高まると共に出土量も急増する。注口土器、釣手土器、ミニチュア土器、土偶、土版、石棒・石剣がこの時期に増加傾向をみせる。こうした高まりに連動して多様化も進み、加曽利B3式期は前後の時期と比較して平均器種数が高い。

安行1式期は前段階から一転して低調な様相を呈する。儀礼関連遺物の出土率は微減だが、出土量は大きく減少している。ほとんどの器種で減少傾向を示しており、平均器種数は対象としている時期の中で最も低い。前後の時期と比較すると谷間の時期とってよいだろう。

安行2式期～安行3b式期は後期から晩期への移行期にあたる。儀礼関連遺物の出土率は安行2式期から急激に高まり安行3a式期で最高潮に達し、安行3b式期からは減少に転じる。出土量は安行1式期から急増し、安行3b式期に最大となる。特に耳飾が爆発的に増加するほか、ミニチュア土器、土版、石棒・石剣なども増加に転じる。また、動物形土製品と独鈷石は後期には全くみられないが、安行3a式期以降少ないながらも認められるようになる。一方で、釣手土器はほとんど認められない。平均器種数も増加傾向にあり、安行3b式期で最大となる。分析対象とした時期の中で、儀礼関連遺物が最も盛行した時期である。

安行3c式期～安行3d式期では再び低調な状況となる。儀礼関連遺物の出土率は前段階よりも低くなるが、後期中葉よりは高い。出土量は激減し、加曽利B1式期～加曽利B2式期、安行1式期と同程度になる。多くの器種で減少傾向を示し、異形台付土器、釣手土器、手燭形土製品はほとんどみられない。一方、平均

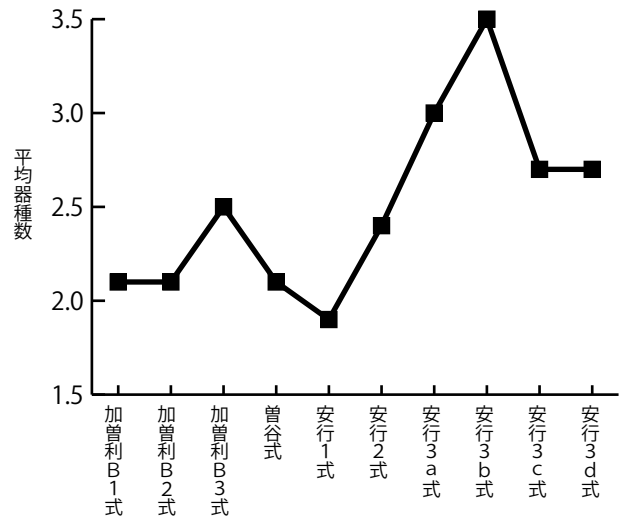


図8 儀礼関連遺物平均器種数の変遷

器種数はそれほど減じておらず、後期よりも多様な器種が出土していることがわかる。

以上のように竪穴住居における儀礼関連遺物は盛行する時期と低調な時期を周期的に繰り返しながら変遷している。しかしながら、儀礼関連遺物が盛行する2つの時期、加曽利B3式期～曾谷式期と安行2式期～安行3b式期とを比較すると出土する器種などに違いがみられる。

2.4. 「時期違い」の検討

2.4.1. 「時期違い」の遺物

竪穴住居跡で出土する儀礼関連遺物の中には住居自体とは時期の異なる可能性が高い遺物が散見される。先述した高井東遺跡7号住居で出土した2個体の異形台付土器(図7)は「時期違い」の一例である。

住居自体と出土遺物との間の時期差はどのように理解されるだろうか。住居の時期判定や儀礼関連遺物の編年が誤っている可能性もあるが、それらは土器型式編年を基盤に成り立っており、トートロジーに陥る危険性がある。異なる時期の遺物が何らかの理由で住居跡に混入したものと判断するのが妥当であろう。以下、住居の時期とは異なる遺物を「時期違い」と呼称する。

住居内における遺物の詳細な出土位置が報告されている場合には遺物の出土レベルも住居との時間的同一性を判断する上で重要な情報となる。床面ないし床面に近いレベルで出土した遺物は住居と同時期ないし近似した時期のものである蓋然性が高い。逆に床面よりも高いレベルで出土している場合には「時期違い」である可能性が高まる。図9には千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡Ⅱ地区59号住居における土製品・石製品などの垂直分布を示した。同図中の床面に近いレベルで出

表 10 「時期違い」出土住居一覧表
(括弧なしの数値は住居よりも新しい遺物、括弧つきの数値は住居よりも古い遺物の出土点数を示している)

No.	遺跡名	遺構名	遺構の帰属時期	異形台付土器	注口土器	釣手土器	ミニチュア土器	土偶	土版	耳飾	手燭形土製品	動物形土製品	石棒・石剣	独鈷石
1	宮内井戸作遺跡	II地区58号住居	安行3C式				(1)							
2	宮内井戸作遺跡	II地区59号住居	加曽利B1式	1			3	1					2	
3	宮内井戸作遺跡	II地区63A号住居	安行3b式					(2)						
4	宮内井戸作遺跡	II地区103号住居	安行1式		1									
5	宮内井戸作遺跡	II地区113・114号住居	加曽利B2式～曾谷式	1					1					
6	三直貝塚	SI-001	加曽利B3式～安行1式		1									
7	三直貝塚	SI-011A	安行2式	(1)										
8	三直貝塚	SI-011C	安行2式～安行3a式	(1)										
9	三直貝塚	SI-022A	安行2式～安行3a式					(1)						
10	三直貝塚	SI-022B	曾谷式～安行1式	1						2				
11	三直貝塚	SI-028	加曽利B2式～加曽利B3式							2				
12	加曽利貝塚	東傾斜面JD-18	加曽利B3式					1						
13	祇園原貝塚	50号住居	加曽利B2式～加曽利B3式						1	2				
14	下水遺跡	21号住居	堀之内2～加曽利B2式	1										
15	六通貝塚	SI-013	晩期前半					(1)						
16	内野第1遺跡	J-13	安行1式					(1)						
17	内野第1遺跡	J-16	曾谷式～安行3a式			2								
18	内野第1遺跡	J-17	加曽利B3式～曾谷式					1						
19	内野第1遺跡	J-20	安行3a式～安行3b式			(1)		(2)						
20	内野第1遺跡	J-21	曾谷式～安行1式					1						
21	内野第1遺跡	J-45	曾谷式～安行1式					(1)						
22	内野第1遺跡	J-48	加曽利B3式～曾谷式					1						
23	内野第1遺跡	J-59	安行2式～安行3b式					(4)						
24	内野第1遺跡	J-63	堀之内2式～加曽利B1式	1										
25	内野第1遺跡	J-74	安行2式					(5)						
26	内野第1遺跡	J-93	加曽利B2式					1						
27	内野第1遺跡	J-95	加曽利B3式～安行1式						1					
28	内野第1遺跡	J-97	後期中葉								1			
29	内野第1遺跡	J-98	安行3a式	(1)				(1)						
30	内野第1遺跡	J-125	安行1式					(2)						
31	上宮田台遺跡	SI010	加曽利B3式					1						
32	上宮田台遺跡	SI016	加曽利B2式					1						
33	上宮田台遺跡	SI032	加曽利B2式					1						
34	上宮田台遺跡	SI043	安行1式					(1)						
35	上宮田台遺跡	SI061	安行3a式～安行3b式	(1)		(1)								
36	上宮田台遺跡	SI074	加曽利B1式			1								
37	上宮田台遺跡	SI214	加曽利B2式～加曽利B3式					2					2	
38	馬場遺跡	2号住居	安行2～3a式				1							
39	馬場遺跡	6号住居	安行3a～安行3b式			(1)								
40	馬場遺跡	10号住居	加曽利B3式				2							
41	馬場遺跡	11号住居	加曽利B3～曾谷式		10	3	16	39	5	1	3	2	2	
42	馬場遺跡	14号住居	安行3b～前浦式			(1)								
43	鹿島台遺跡	DSI-001	安行1式	(1)										
44	藤岡神社遺跡	S323	安行1式							2			1	
45	藤岡神社遺跡	S946	安行2式					(1)						
46	藤岡神社遺跡	S1200	安行2式						1					
47	高井東遺跡	7号住居	加曽利B1式	2									1	
48	高井東遺跡	10A・B号住居	安行3a式					(1)	2					
49	高井東遺跡	13号住居	安行1式～安行3a式					(1)						
50	高井東遺跡	19号住居	加曽利B1式							1				
51	高井東遺跡	21号住居	加曽利B3式					1						
52	奈良瀬戸遺跡	2号住居	安行3c式		(1)									
53	南方遺跡	8号住居	加曽利B1式～加曽利B3式		1			(1)		2				
54	中野遺跡	2号住居	安行3b式		(1)									
55	諏訪木遺跡	D区1号住居	安行3a式～安行3b式					(1)						
56	諏訪木遺跡	D区10号住居	安行1式～安行2式						1					
57	赤城遺跡	12号住居	加曽利B2式					1						
58	上境旭台貝塚	12号住居	安行1式～安行2式	(1)										

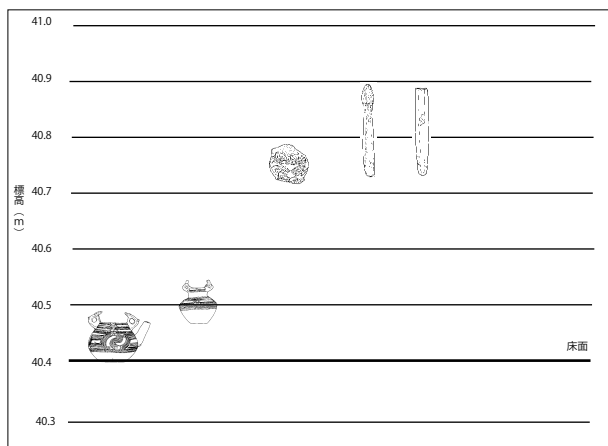


図9 宮内井戸作遺跡II地区59号住居遺物垂直分布図

土している2個体の注口土器はいずれも加曾利B1式であり同居は加曾利B1式期に位置づけられる。一方、比較的高いレベルで出土している図中の土偶は安行1式期のものであり、「時期違い」である。また、石剣2点は後藤信祐氏による型式分類（後藤1986、1987）のうちのなすな原型a類に相当すると考えられ、晩期前葉に位置づけられる。これらの「時期違い」は、いずれも床面から浮いた位置で出土していることがわかる。

型式編年と出土層位に依拠して「時期違い」を抽出した。その結果、住居よりも新しい時期の遺物が出土する場合と、住居よりも古い時期の遺物が出土する場合とが認められた。そうした事例を竪穴住居ごとに集計した結果が表10である。また、表11には器種ごとに「時期違い」の数を示した。

「時期違い」には2種類がある。新しい時期の遺物

表11 器種別「時期違い」出土量

	遺構より新しい	遺構より古い
異形台付土器	7	6
注口土器	14	1
釣手土器	4	6
ミニチュア土器	22	1
土偶	54	25
土版	12	0
耳飾	12	0
手燭形土製品	4	0
動物形土製品	2	0
石棒・石剣	8	0
独鈷石	0	0

が古い時期の住居から出土する場合と、古い時期の遺物が新しい時期の住居から出土する場合とである。

器種ごとにみると、特に土偶で顕著に「時期違い」が認められるが、一方で出土量の最も多い儀礼関連遺物である耳飾では非常にまれである。

なお、独鈷石は編年研究が現状ではあまり進展しておらず遺物自体の詳細な時期を特定できない。そのため「時期違い」を抽出することはできない。

ここでは「時期違い」を除外した上で儀礼関連遺物の変遷を改めて検討する。なぜなら、「時期違い」は埋没過程で住居内に混入したものであり、その原因がいかなるものであるにせよ、住居が使用された時期ないし住居廃絶時点の人々の意図を反映したものではない可能性があるからだ。「時期違い」を除外することで住居の時期ないし住居廃絶時点での儀礼行為の実態によりの確なアプローチが可能となる。

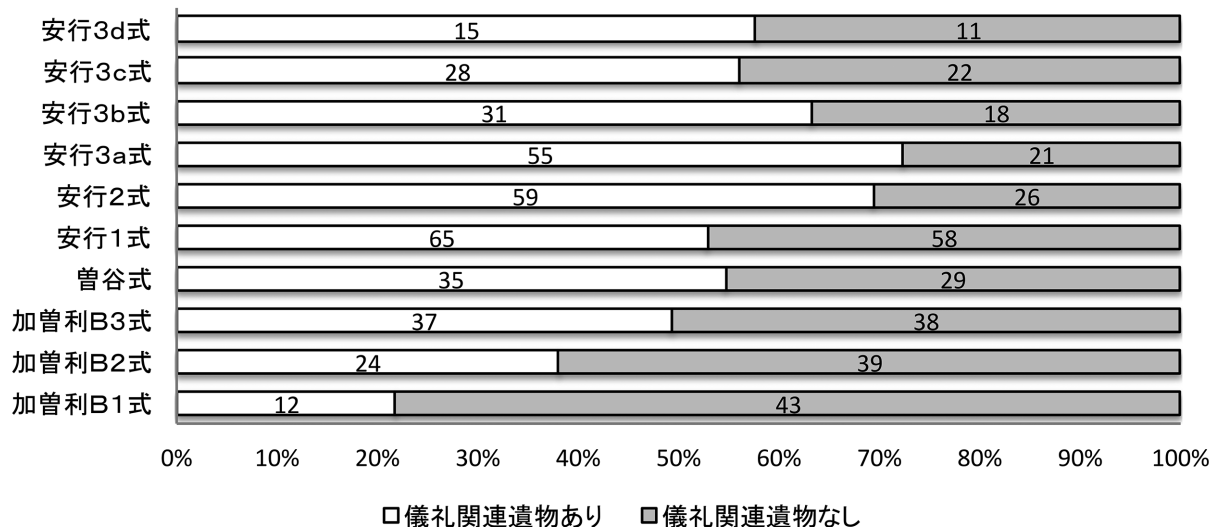
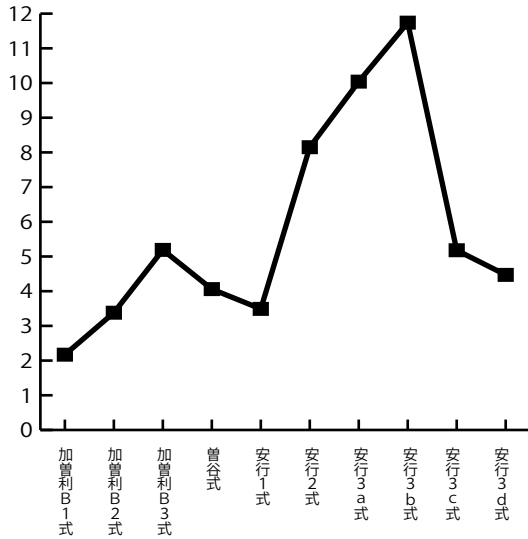
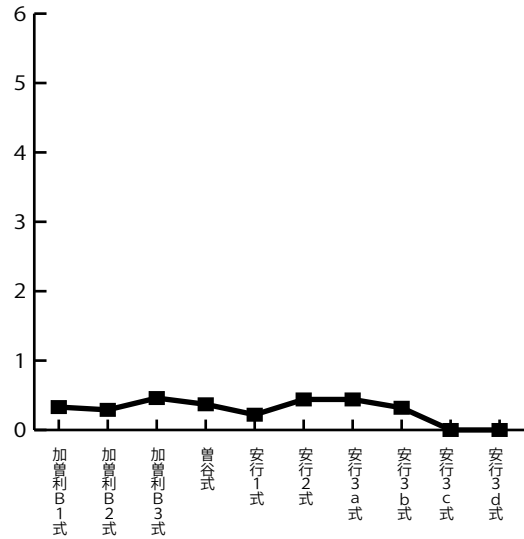


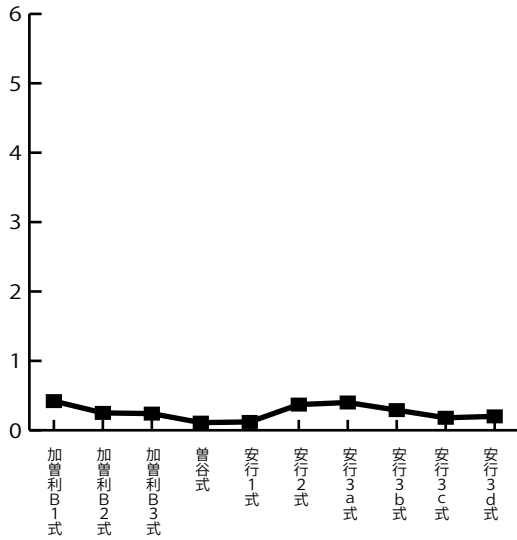
図10 儀礼関連遺物出土率の変遷（「時期違い」を除外した場合）



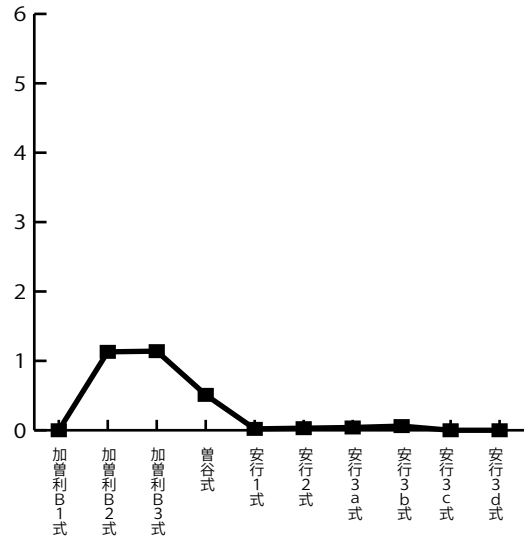
1. 儀礼関連遺物（全器種）出土点数の変遷



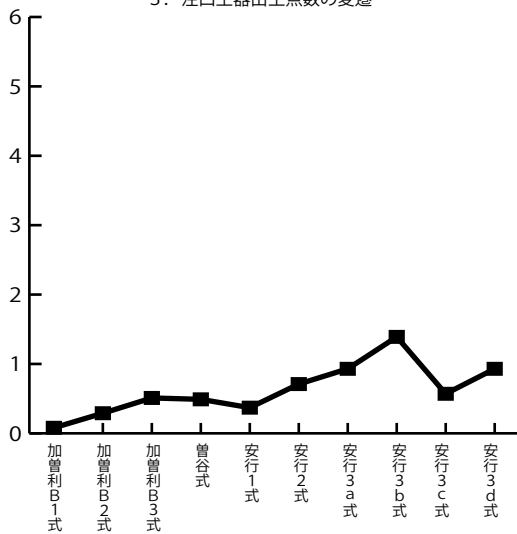
2. 異形台付土器出土点数の変遷



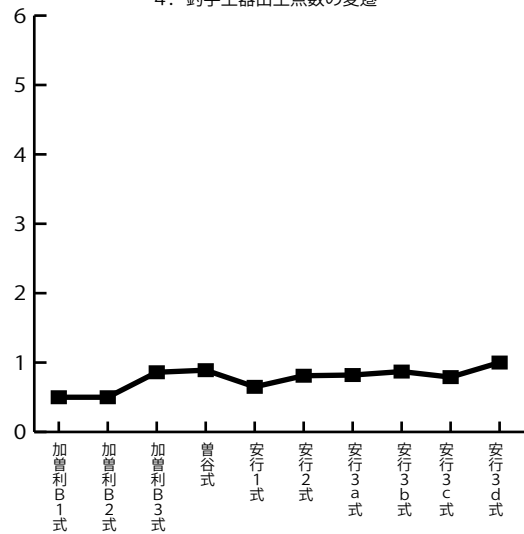
3. 注口土器出土点数の変遷



4. 釣手土器出土点数の変遷

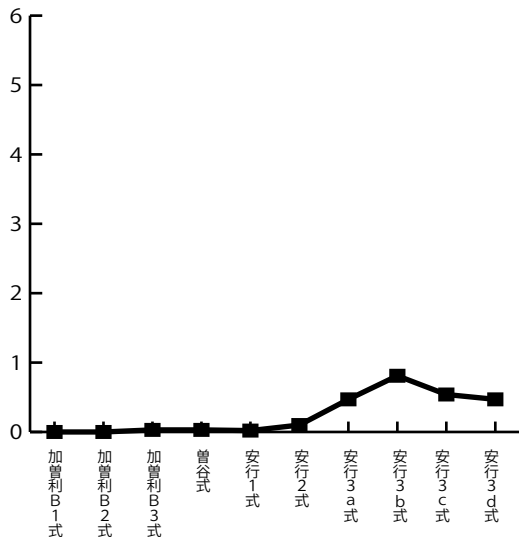


5. ミニチュア土器出土点数の変遷

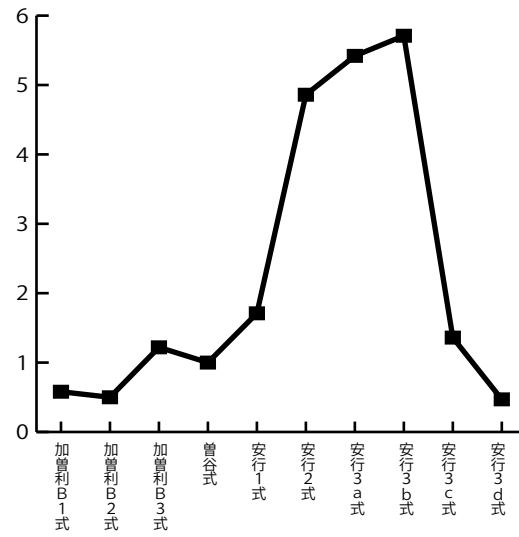


6. 土偶出土点数の変遷

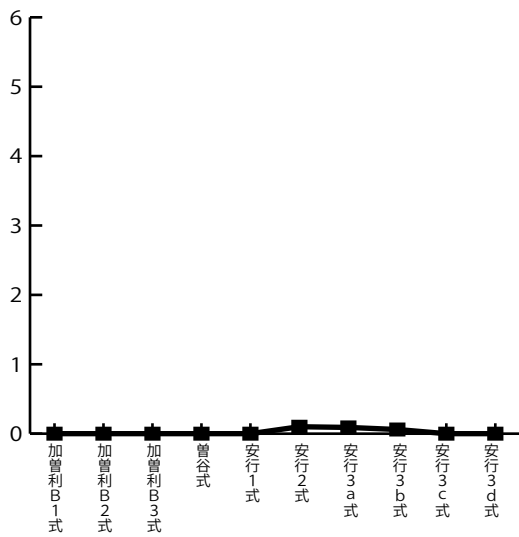
図 11 住居 1 軒あたりの儀礼関連遺物出土点数の変遷（「時期違い」を除外した場合）（1）



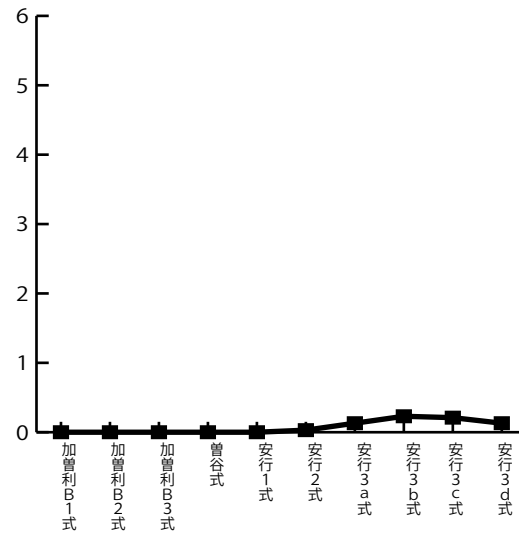
7. 土版出土点数の変遷



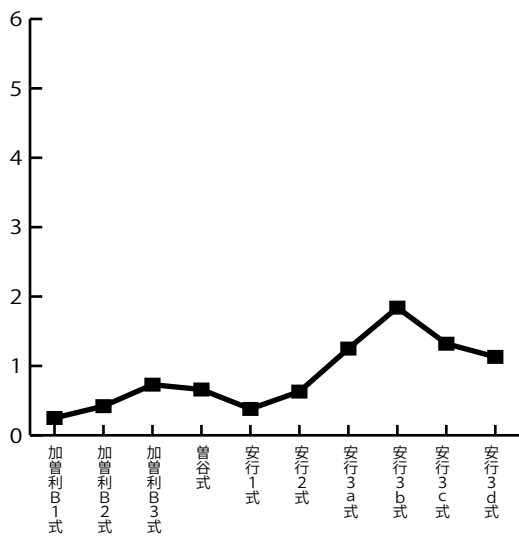
8. 耳飾出土点数の変遷



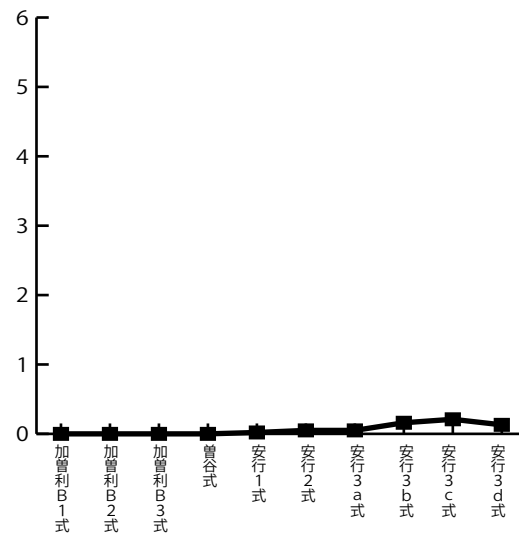
9. 手燭形土製品出土点数の変遷



10. 動物形土製品出土点数の変遷



11. 石棒・石剣出土点数の変遷



12. 独鈷石出土点数の変遷

図12 住居1軒あたりの儀礼関連遺物出土点数の変遷（「時期違い」を除外した場合）（2）

2.4.2. 儀礼関連遺物出土率の変遷（「時期違い」を除外した場合）

「時期違い」を除外した上で、各時期の住居数に対する儀礼関連遺物が出土した竪穴住居跡の割合を検討した。図 10 は各時期における出土率を示したものである。「時期違い」を除外しない場合の出土率（図 4）との差がみられるのは後期の範囲である。この差は竪穴住居跡で出土する儀礼関連遺物が全て「時期違い」であるような住居の数を示している。そのような住居は 15 例存在するが、全て後期に属している。

2.4.3. 儀礼関連遺物出土量の変遷（「時期違い」を除外した場合）

次に、「時期違い」を除外した場合の儀礼関連遺物の出土量の変遷を分析する。除外しない場合と同様に、各時期で住居数が異なるため、住居あたりの出土量を比較する。図 11、図 12 に時期ごとの平均出土量の変遷を示した。

図 11 - 1 は各時期において儀礼関連遺物として抽出した 11 器種全ての出土量を合計し、住居あたりの出土量とその変遷を示している。図 11 - 1 では安行 2 式期～安行 3 b 式期に儀礼関連遺物の出土量が増加していることがわかる。「時期違い」を除外しない場合に明瞭な増加傾向を示していた加曾利 B 3 式期～曾谷式期の出土量は突出して多いとはいえない。加曾利 B 3 式期にはやや出土量が多いが、続く曾谷式期にはすぐに減少に転じている。竪穴住居に儀礼関連遺物の変遷 2 段階のピークが存在することを指摘したが、「時期違い」を除外した場合は、一方の加曾利 B 3 式期～曾谷式期は儀礼関連遺物が特に盛行した時期とは認められない。

図 11 - 2～6、図 12 - 7～12 では各器種の出土量の変遷を示した。ただし、手燭形土製品、動物形土製品、独鈷石については「時期違い」を除外した結果さらに資料数が少なくなり、変遷を検討するには制約が大きい。

異形台付土器は出土量がそれほど大きく変化しない（図 11 - 2）。異形台付土器の出現は加曾利 B 2 式期とされている（内田 1978、1984）。したがって、「時期違い」を排除してしまえば加曾利 B 1 式期の住居では異形台付土器は存在し得ない。ところが図 26 - 2 では加曾利 B 1 式期の住居で異形台付土器が出土したことが示されている。

加曾利 B 1 式期の住居で異形台付土器が出土しているのは千葉県松戸市下水遺跡 20 号住居と高井東遺跡 7 号住居および 15・16 号住居で、いずれも 2 点の

異形台付土器が出土している。下水遺跡 20 号住居と高井東遺跡 15・16 号住居はいずれも加曾利 B 1 式～加曾利 B 3 式に比定されており、比較的長期間にわたって営まれたことが想定される住居である。

遺物にも時間幅があり、出土している異形台付土器はいずれも加曾利 B 1 式のものではない。しかしながら、住居の帰属時期が加曾利 B 1 式～加曾利 B 3 式期に比定されるため、加曾利 B 1 式期の住居としてカウントせざるを得ず、図 11 - 2 に反映されてしまった。

異形台付土器に限らないが、住居が複数の土器型式にまたがる場合があるため「時期違い」を完全に排除できるわけではないことには留意したい。

異形台付土器の「時期違い」には新しい時期の遺物が古い時期の住居で出土する場合と、古い時期の遺物が新しい時期の住居から出土する場合との両方が存在し、ほぼ半々である（表 11）。

注口土器は各時期を通じて出土しており出土量の変化も小さいが（図 11 - 3）、安行 2 式期～安行 3 a 式期にやや出土量が多い。「時期違い」除外前後を比較すると、除外前には加曾利 B 3 式期～曾谷式期に比較的多くみられたが、除外後には増加傾向が認められない。こうした点は全体の傾向と一致している。

表 11 に示したように、注口土器については 15 例の時期違いを抽出しており、その多くは後期後葉～晩期初頭の注口土器が加曾利 B 式期～曾谷式期の住居で出土するという例である。

釣手土器は加曾利 B 2 式期～曾谷式期に突出して出土量が多く（図 11 - 4）、他の時期にはほとんどみられない。釣手土器の「時期違い」は比較的少なく（表 11）、「時期違い」除外前後での変化は小さい。除外前は後期後葉～晩期初頭に若干みられた釣手土器はほとんどが「時期違い」であり、「時期違い」を除外するとほとんど残らない。

釣手土器は加曾利 B 2 式期に出現し後期後葉に姿を消すとされており（中村 2008；蜂屋 2006、2013）、本稿で分析対象とした時期の前半に位置づけられる。釣手土器では他の器種とは異なり、古い時期の遺物が新しい時期の住居で出土する「時期違い」が多い。

ミニチュア土器は安行 2 式期以降に出土量が多い（図 11 - 5）。「時期違い」除外前後を比較すると、加曾利 B 3 式期～曾谷式期の出土量が減少しているという点が概ね全体の傾向に一致している。

ミニチュア土器は手捏ね成形による無文の例が非常に多いという特徴があり、時期の特定が難しく、編年研究も未発達である（菅野 2008）。そのため、全て

の「時期違い」が抽出されたわけではないだろうが、抽出された「時期違い」の多くは晩期のミニチュア土器が後期中葉の住居から出土するという例であった。

土偶は「時期違い」を除外しても後期・晩期を通じて比較的出土量の多い遺物であるが、「時期違い」除外前と比較すると、特に加曾利 B 3 式期～曾谷式期に突出して出土量が多いということはない(図 11-6)。加曾利 B 3 式期～曾谷式期に平均出土量が大きく増加する要因として土偶 45 点が出土した馬場遺跡 11 号住居をあげたが、同住居で出土した土偶 45 点のうち 39 点は「時期違い」で、後期末～晩期前葉のいわゆるミミズク土偶であった。

土版の出土量はそれほど多くはなく、ほぼ晩期にしかみられない。(図 12-7)。土版は編年的には晩期の遺物であり(鷹野 1977)、加曾利 B 3 式期～曾谷式期に若干みられた出土例は「時期違い」として除外された。土版については古い時期の遺物が新しい時期の住居から出土する事例は確認されていない。

耳飾は各時期にみられ、「時期違い」を除外した場合でも安行 2 式期～安行 3 b 式期に爆発的に増加するという傾向は変わらない(図 12-8)。耳飾は出土量が非常に多い遺物であるが、「時期違い」は少ない。無文の小形耳飾は各時期にみられ、遺物から詳細な時期が特定できないため「時期違い」として抽出されていない個体が存在する可能性は高い。しかし、安行 2 式以降にみられるような大形化した耳飾が安行 1 式以前の住居で出土する例はほとんどない。表 11 に示したように、若干の例はみられるものの、耳飾の総量から考えると「時期違い」は非常に稀といえる。

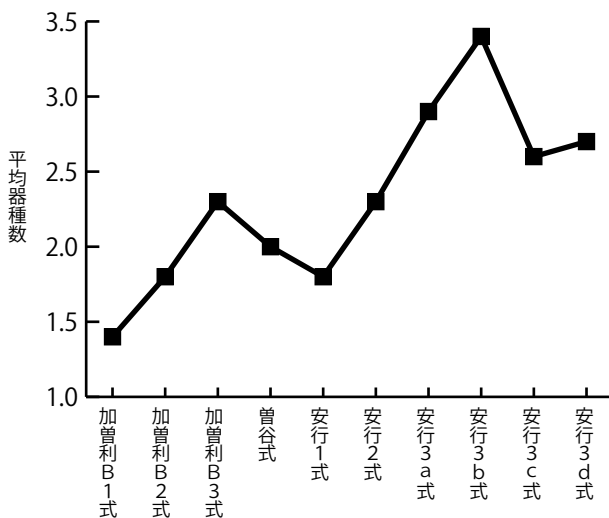


図 13 儀礼関連遺物の平均器種数の変遷
 (「時期違い」を除外した場合)

手燭形土製品の出土例はごくわずかであり、「時期違い」を除外すると安行 2 式期～安行 3 b 式期に若干みられるのみである(図 12-9)。手燭形土製品の存続期間は安行 1 式～後期中葉までとされており(蜂屋 2006、2007、2012)、加曾利 B 3 式期～曾谷式期の住居跡からの出土例は「時期違い」である。

動物形土製品は手燭形土製品同様に極めて出土量が少ないが、「時期違い」を除外した場合でもほぼ晩期にしかみられないという傾向に変化はない(図 12-10)。動物形土製品の「時期違い」はほとんど確認できない。

石棒・石剣は安定的に出土するが加曾利 B 3 式期～曾谷式期、晩期に出土量が増加する傾向にある(図 12-11)。「時期違い」除外前後で大きな変化はない。「時期違い」としては後期後葉～晩期に位置づけられる石剣が後期中葉の住居跡で出土する例がいくつかあり、古い時期の遺物が新しい時期の住居で出土する「時期違い」は認められない。

独鈷石の「時期違い」は抽出されていないので図 6-12 と図 12-12 との違いはない。

全体的な傾向としては安行 2 式期～安行 3 b 式期に出土量が増加している。「時期違い」除外前後を比較すると加曾利 B 3 式期～曾谷式期で差が大きい。除外前の加曾利 B 3 式期～曾谷式期は増加傾向が明瞭であったが、除外後にはそうした傾向は看取されない。この結果は加曾利 B 3 式期～曾谷式期に「時期違い」の遺物が多いということを示している。

器種ごとにもみるとそれぞれ異なる傾向を示す。「時期違い」除外前後で差のある器種があり、いくつかの器種には加曾利 B 3 式期～曾谷式期の出土量が減るという傾向がみられた。ミニチュア土器、土偶、土版、手燭形土製品でそのような傾向が認められるが、特に土偶で顕著である。

以上のように竪穴住居跡における「時期違い」を除外した場合の儀礼関連遺物の出土量は、安行 2 式期～安行 3 b 式期に顕著な増加傾向をみせる。「時期違い」除外前後の差としては、加曾利 B 3 式期～曾谷式期の出土量が大きく減少している。

2.4.4. 器種数の変遷(「時期違い」を除外した場合)

「時期違い」を除外した場合の儀礼関連遺物の多様性について検討する。住居ごとに「時期違い」を除いて何種類の儀礼関連遺物が出土しているのかを集計し、時期ごとの平均器種数とその変遷を図 13 に示した。

全体的に後期よりも晩期の方が多様な器種が出土し

ていることがわかる。後期では加曽利 B 3 式期、晩期では安行 3 b 式期にピークがあるが、特に安行 3 b 式期では平均 3.5 種の儀礼関連遺物が出土している。以上のような傾向は「時期違い」除外前後でほとんど変化していない。加曽利 B 3 式期～曾谷式期には多量の「時期違い」が認められるが、ほとんどが馬場遺跡 11 号住居に代表される一部の住居に集中しているためだろう。

2.4.5. 各時期の様相(「時期違い」を除外した場合)

以上の分析で明らかになった各時期の様相を、「時期違い」除外前後で比較しつつまとめる。

加曽利 B 1 式期～加曽利 B 2 式期は相対的に儀礼関連遺物出土率が低く、出土量も少ない時期であり、その傾向は「時期違い」除外前後で変化はない。「時期違い」例が多くみられ、除外前後で出土量は若干減少している。加曽利 B 1 式期は加曽利 B 2 式期よりも減少幅が大きく、より多くの「時期違い」があることを示している。

加曽利 B 3 式期～曾谷式期は「時期違い」除外前後の差が最も大きい時期である。出土率、平均器種数はそれほど変化していないが、出土量の変化は大きい。「時期違い」除外前には出土量が突出して増加する時期であったが、「時期違い」を除外すると前後の時期と明瞭な差はみられない。器種ごとにみると釣手土器、石棒・石剣は除外前後ではほぼ変わらず増加傾向を示すが、ミニチュア土器、土偶、土版、手燭形土製品は「時期違い」を除外することで出土量が減じる。

安行 1 式期はやはり谷間の時期である。「時期違い」を除外することで出土量の減る加曽利 B 3 式期～曾谷

式期と比較してもなお出土量が少なく、儀礼関連遺物が低調な時期であったと考えられる。出土率については微減だが、平均器種数はやはり谷間の時期であることを示している。

安行 2 式期～安行 3 b 式期は「時期違い」除外前と変わらず儀礼関連遺物の出土量が急増する時期である。出土率、平均器種数も同様である。この段階の「時期違い」はほとんどない。

安行 3 c 式期～安行 3 d 式期には再び低調な状況に転じる。この傾向は「時期違い」除外前後でほとんど変化していない。この段階では前段階と同様に「時期違い」がほとんど確認されておらず、「時期違い」除外前後での差はほとんどない。

「時期違い」を除外した場合だと加曽利 B 3 式期～曾谷式期が儀礼関連遺物の盛行期とは認められない。安行 1 式期までは比較的低调な時期が続き、安行 2 式期～安行 3 b 式期に最盛期を迎え、その後晩期中葉には再び低調気味になるという変遷をたどる。

2.5. 住居の規模との関係

2.5.1. 規模による住居の分類

本研究で集成した竪穴住居の規模は大小かなりの幅がある。住居の長軸長で比較すると最小の住居は千葉県千葉市六通貝塚 SI-020 などの 3.0 メートルである。最大の住居は宮内井戸作遺跡 II 地区 113 号住居で長軸は 19.2 メートルを測る。

住居の規模は儀礼に関係があるという可能性が指摘されている。千葉県を中心に分布する大型住居では儀礼関連遺物が出土する頻度が高いことが指摘されており、大型住居の儀礼的性格が指摘されている（高橋

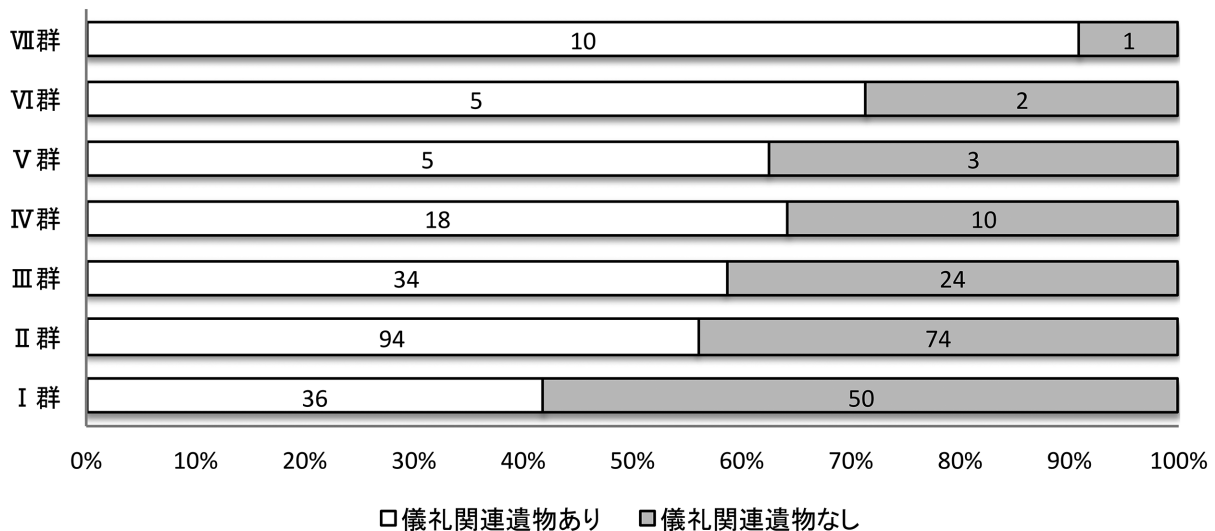


図 14 住居の規模別儀礼関連遺物出土率

2001；吉野 2007)。一方で、比較的規模の小さい住居においても儀礼関連遺物の出土は認められる。

そこで、住居の規模と儀礼関連遺物の出土との関係进行分析する。分析にあたり、集成した全ての住居を規模によって分類した。以下分類の方法を説明していく。

まず、竪穴住居の平面プランを、「長軸を長径、短軸を短径とする楕円形」として規格化する。後期中葉から晩期中葉の竪穴住居には時期・地域により多様な平面形態がみられる（菅谷 1985、1995）。そのため、住居の規模を比較する場合には、床面積によって比較するのが最も適切であろう。プランメーターなどを用いて正確な床面積を求める必要があるが、遺存状態や調査上の都合により正確な外形が把握できない住居も多い。そこで、住居の平面プランを上記のように規格化した上で床面積を求めることとする。なお、住居の全形が把握できず、長軸・短軸の一方しか測れない住居については、平面プランを「長軸（短軸）を直径とする円形」として規格化する。

このように住居の平面プランを規格化した場合住居の床面積は次のようになる。

住居の床面積

$$= (\text{長径の半分}) \times (\text{短径の半分}) \times \text{円周率}$$

$$= (\text{長軸}) \times (\text{短軸}) \times 0.25 \times \pi$$

住居の床面積を S 、床面積の平均値を M 、床面積の標準偏差を σ とする。床面積の分散により、下記の基準で全住居を 7 群に分類する。

$$\text{I 群} : S < M - \sigma$$

$$\text{II 群} : M - \sigma \leq S < M - 0.5 \sigma$$

$$\text{III 群} : M - 0.5 \sigma \leq S < M$$

$$\text{IV 群} : M \leq S < M + 0.5 \sigma$$

$$\text{V 群} : M + 0.5 \sigma \leq S < M + \sigma$$

$$\text{VI 群} : M + \sigma \leq S < M + 1.5 \sigma$$

$$\text{VII 群} : M + 1.5 \sigma \leq S$$

床面積の平均値は 39.5 平方メートル、標準偏差は 37.2 となった。上記の定義により竪穴住居を規模別に分類した。各住居がいずれの群に属するかは表 1～表 9 に示している。なお、空欄になっている住居については遺存状態が悪く住居の規模が把握できない住居である。それらの住居は以下の分析には加えない。

2.5.2. 各群における儀礼関連遺物の出土率

図 14 で各群における儀礼関連遺物が出土した住居の割合を示している。I 群が最も出土率が低く、VII 群が最も高い。住居の規模が大きい群ほど儀礼関連遺物の出土率が高いという傾向にあるといえる。

2.5.3. 各群における儀礼関連遺物の出土量

各群における儀礼関連遺物の出土量を検討する。これまでの分析と同様に、各群で住居数が異なるため、住居あたりの平均出土量を比較する。

図 15 では各群における儀礼関連遺物全器種の平均出土量を示した。概ね住居の規模に比例して儀礼関連遺物の出土量が増加するという傾向にあるが、VI 群の出土量が圧倒的に多い。VI 群には集成した住居の中で儀礼関連遺物の出土量が最も多い馬場遺跡 11 号住居と 2 番目に多い三直貝塚 SI-004B を含むことが影響しているのだろう。

2.5.4. 各群における儀礼関連遺物の器種数

各群における儀礼関連遺物の多様性を検討する。図 16 に各群において住居あたりの平均器種数を示している。最も器種数が豊富なのは VII 群であり、最も器種数が少ないのは I 群である。住居の規模に比例して儀礼関連遺物の器種数が増加するという傾向が読み取れる。住居の規模と儀礼関連遺物の多様性は相関関係にあるといってよいだろう。

2.5.5. 各群における儀礼関連遺物の出土量（「時期違い」を除外した場合）

各群における「時期違い」のあり方を検討する。図 17 では各群における「時期違い」を除外した場合の儀礼関連遺物出土量を示している。いずれの群にも「時期違い」が認められ、「時期違い」除外前後を比較すると出土量が減少しているが、減少幅が際立って大きいのは VI 群である。概ね住居の規模が大きい群ほど減少幅が大きいといえる。このことから、「時期違い」は規模の大きい住居ほど多く、とりわけ VI 群に多いということがいえる。

2.5.6. 住居の規模と儀礼関連遺物の関係

以上の分析を通じて住居の規模と儀礼関連遺物との間には相関関係があることがわかった。

儀礼関連遺物の出土率、出土量、平均器種数は住居の規模が大きい群ほど高い数値を示すという傾向にある。ただし、出土量については最大規模の VII 群よりも一回り小さい VI 群で圧倒的に多い。

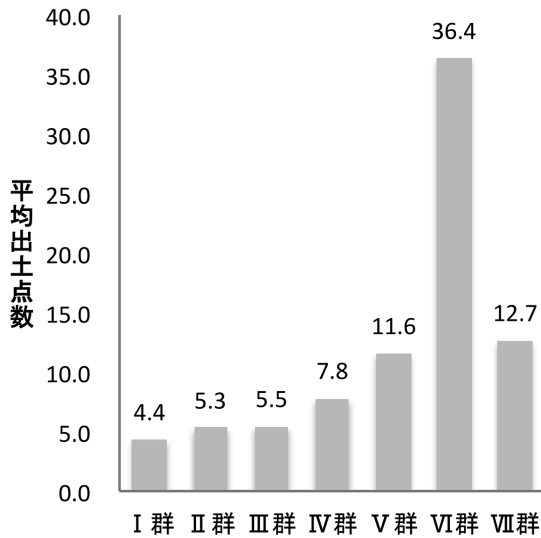


図 15 住居の規模別儀礼関連遺物出土量

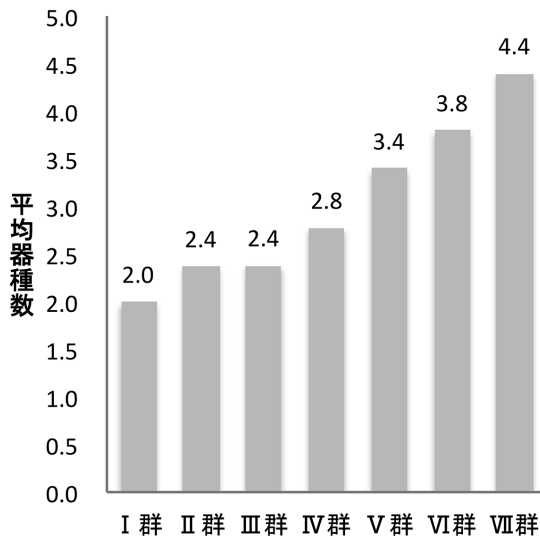


図 16 住居の規模別儀礼関連遺物の平均器種数

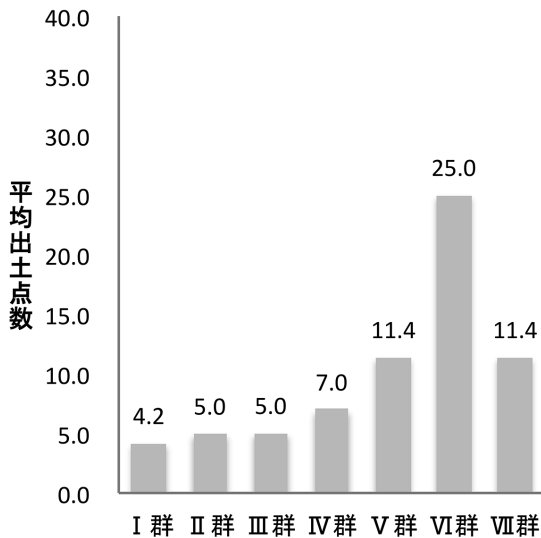


図 17 住居の規模別儀礼関連遺物出土量
 (「時期違い」を除外した場合)

「時期違い」についても概ね住居の規模が大きい群ほど多いといえるが、とりわけVI群で多い。

以上の結果から、住居の規模が大きいほど儀礼関連遺物との関係が強まる傾向にある。

3. 分析結果の検討

3.1. 分析の結果

分析の結果から、以下の点が明らかになった。

- ・加曾利 B 3 式期～曾谷式期および安行 2 式期～安行 3 b 式期に竪穴住居で出土する儀礼関連遺物が多様化・多量化する。
- ・時期により主体となる器種に変化があり、加曾利 B 3 式期～曾谷式期には土偶が多く、安行 2 式期～安行 3 b 式期には耳飾が多い。
- ・後期中葉の住居では後期後葉以降の儀礼関連遺物が出土する「時期違い」の例が多い。
- ・後期末～晩期の住居では後期中葉以前の儀礼関連遺物が出土する「時期違い」の例が散見される。
- ・規模の大きい住居ほど多量かつ多様な儀礼関連遺物が出土する傾向にある。
- ・「時期違い」は規模の大きい住居に多い。

3.2. 「時期違い」の解釈

「時期違い」には 2 つのパターンが存在する。1 つは古い時期の遺物が新しい時期の住居で出土する場合、もう 1 つは新しい時期の遺物が古い時期の住居で出土する場合である。

古い時期の遺物が新しい時期の住居から出土する「時期違い」については、後期後葉以降の住居にみられ、それほど多くはない。器種としては土偶が多く、加曾利 B 式期の土偶が出土する例が多い。

新しい時期の遺物が古い時期の住居から出土する「時期違い」については、後期中葉の規模の大きい住居に多いことが分かった。器種は土偶が顕著で、ついでミニチュア土器が多い。土版、手燭形土製品、石棒・石剣もわずかに認められる。

これらの「時期違い」がどのようなコンテキストの下出土しているのか考察していく。

桐生直彦(1989)によれば住居跡における遺物の由来は転用、遺棄、廃棄、流入の 4 パターンに分類される。

転用は住居利用時点から住居の付帯施設として利用されていた器物が住居廃絶時にそのまま残されたものであり、埋甕などが該当する。遺棄は住居廃絶時点で住居内に残されたものである。廃棄は住居廃絶後に意図的に棄てられたものをさす。流入は住居廃絶後に自

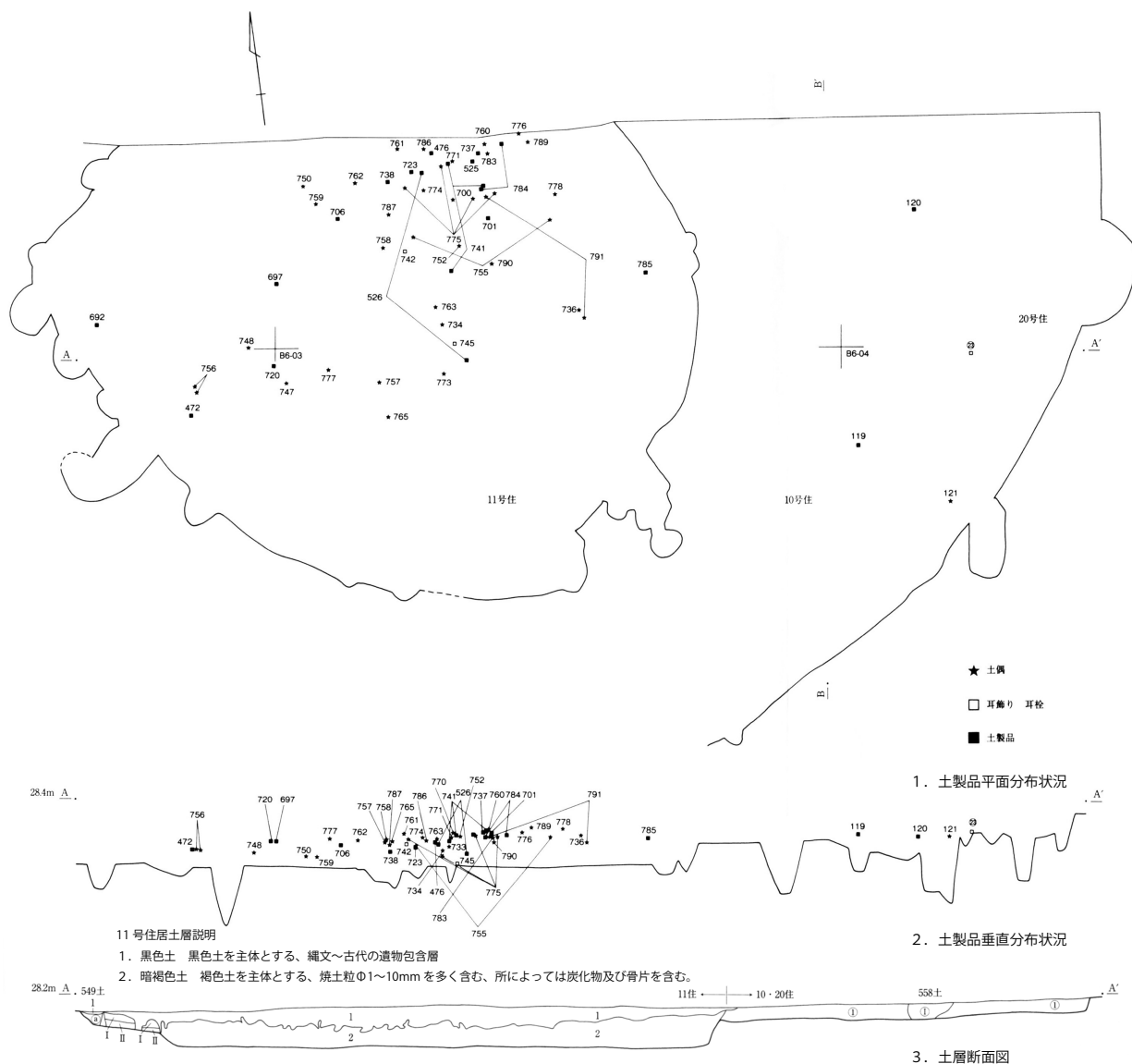


図18 馬場遺跡10・11・20号住居土製品分布状況・土層断面図

然営力等によって人間の意図を介さずに住居内に入り込んだものである。

古い時期の遺物が新しい時期の住居で出土するパターンについては全ての可能性が考えられる。しかし、流入の可能性は極めて低いように思われる。なぜなら、土層は徐々に新しい時期の層が堆積していき、土層中に含まれる遺物も対応した時期のものであると考えるのが一般的だからである。遺構の重複等により異なる時期の遺物が混入する可能性も考えられなくはないが、遺構の覆土中で出土する遺物は遺構自体と同時期ないしはより新しい時期のものであると考えるのが普通であろう。

したがって、古い時期の遺物は転用、遺棄、廃棄のいずれかの結果として新しい時期の住居から出土していることになる。いずれの場合にせよ人間の意図的な

行為の結果として出土したものといえよう。儀礼関連遺物の性格を鑑みると、何らかの儀礼行為の痕跡であると判断してよいだろう。

続いて、新しい時期の遺物が古い時期の住居で出土する場合の「時期違い」について検討してみよう。

まず、転用、遺棄の可能性は理論的にありえない。なぜなら、このタイプの「時期違い」として出土する遺物は型式学的には住居利用時点および廃絶時点で存在しないものだからである。

次に、住居が埋没する過程での流入の可能性が疑われる。先ほど述べたように、遺構内の覆土中から堆積時点の遺物が出土するのはごく普通のことだからである。流入の可能性を一概に否定することはできない。

しかし、意図的な廃棄の可能性もかなり高いように思われる。過去の住居跡に対して儀礼関連遺物を意図

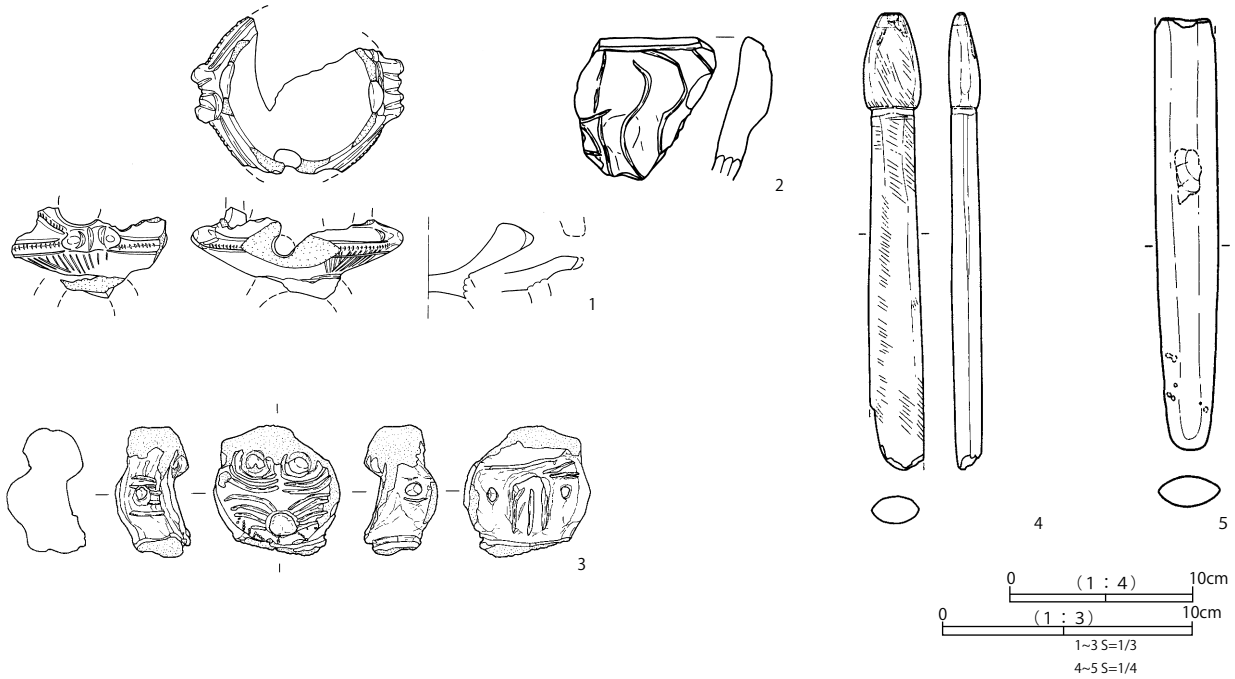


図 19 宮内井戸作遺跡Ⅱ地区 59 号住居出土「時期違い」遺物

的に投棄する行為が存在したのではないだろうか。根拠は以下の 3 点である。

- ①一部の住居に集中する傾向があること。
- ②器種に偏りがみられること。
- ③安行 2 式を境に急増すること。

①については、規模の大きい住居ほど「時期違い」が顕著になることを示した。さらに、隣接する住居同士においても「時期違い」の出土量に大きな偏りがある場合もある。馬場遺跡 11 号住居は同 10 号住居・20 号住居と切り合い関係にある(図 18)。11 号住居では土偶を主体として大量の土製品が出土しているが、そのほとんどは後期後葉以降のものであり、「時期違い」である。しかしながら、切り合い関係にある 10・20 号住居では土製品はほとんど出土していない。これらの 3 住居はいずれも加曾利 B 3 式期～曾谷式期に位置づけられ、近接した時期の建て替えと考えられる。立地を同じくしており時期も近接することから埋没条件に大きな差があったとは考えがたい。11 号住居にのみ、住居自体よりも新しい時期の儀礼関連遺物が意図的に廃棄されたものと考えられる。

②については、新しい時期の遺物が古い時期の住居から出土する「時期違い」には耳飾がほとんどみられないことがあげられる。後期後葉～晩期前葉の土偶やミニチュア土器はしばしば「時期違い」として出土し

ているが、同時期の儀礼関連遺物としては最も量の多い耳飾はほとんど例がない。器種を選択して古い時期の住居跡に廃棄したのであり、耳飾は選択から外れていたことが想定される。

③について、このタイプの「時期違い」として出土する儀礼関連遺物はほとんどが後期後葉以降のものである。それ以前の時期の遺物、例えば曾谷式の異形台付土器が加曾利 B 1 式の住居で出土するような例は少ない。本研究の対象外であるため定量的には示せないが、後期前葉以前の住居から後期中葉の儀礼関連遺物が出土する例はそれほど多くないのではなかろうか。少なくとも本研究で扱った事例のように、「時期違い」がまとまった量出土したという例は寡聞にして把握していない。

以上の理由から、住居と異なる時期の儀礼関連遺物は、偶発的な現象ではなく、儀礼関連遺物を投棄する行為の痕跡である可能性が高い。

過去の住居、なかんずく大型住居が廃絶後も儀礼の場として機能したのではないだろうか。おそらく、廃絶後半ば埋没して窪みになった住居跡で何らかの儀礼を行い、儀礼の最後に土偶などをその場に廃棄したのだろう。馬場遺跡 11 号住居(図 18)では覆土中で土偶などの土製品が集中的に出土する。また、遺物集中地点の直下の層(土層断面図の 2 層)には焼土が多く含まれており、埋没過程で火を伴う儀礼行為が行われ、その場に儀礼関連遺物が廃棄された可能性

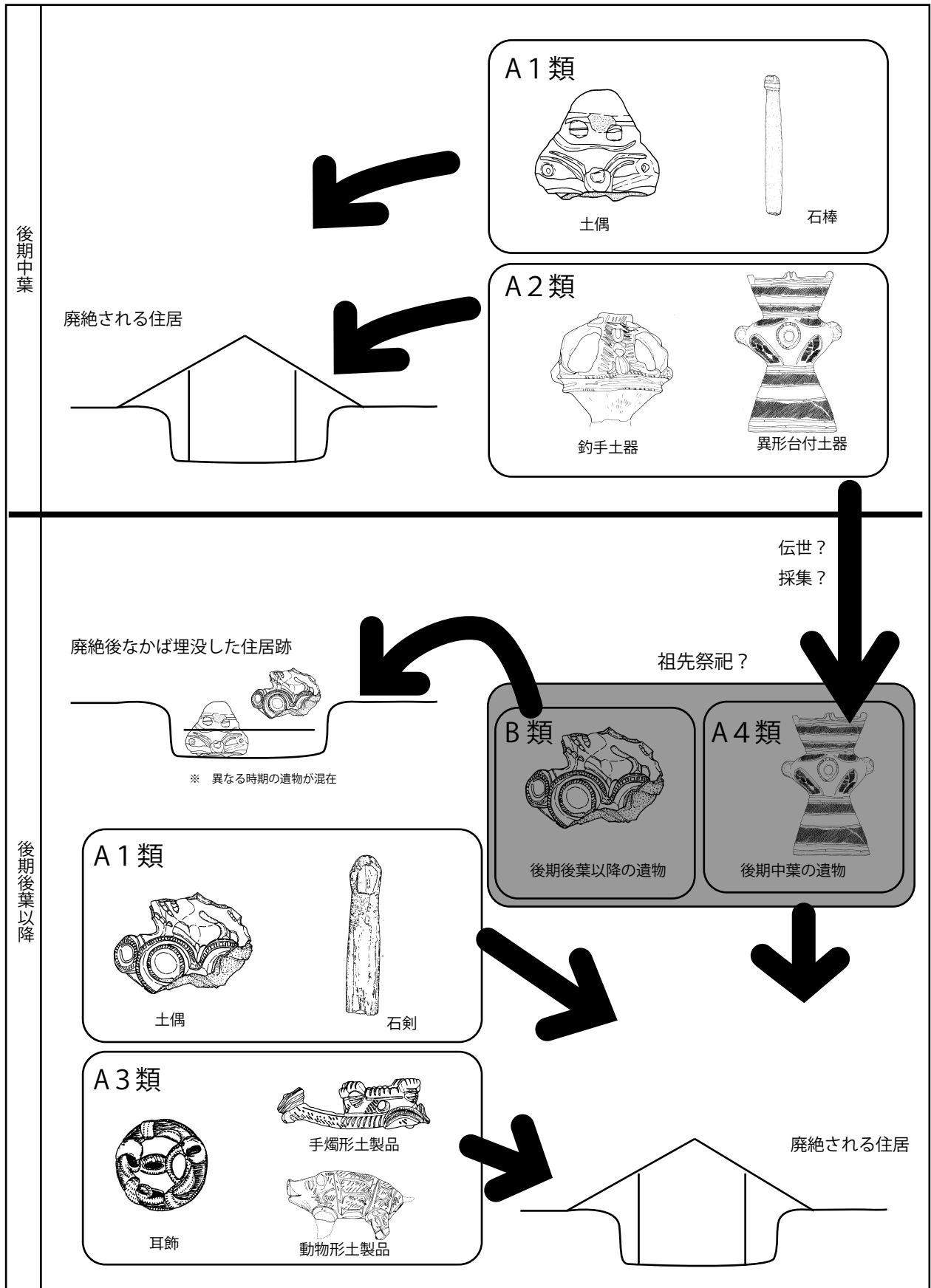


図 20 縄文後期・晩期の竪穴住居儀礼

がある。

そのような儀礼行為が後期後葉以降、盛んに行われるようになったのだろう。その痕跡と考えられる「時期違い」の遺物には同一住居跡で出土した場合でも時期差がある場合がある。

宮内井戸作遺跡Ⅱ地区 59 号住居（加曾利 B 1 式期）の「時期違い」には異形台付土器、ミニチュア土器、土偶、石剣などがある（図 19）。異形台付土器（図 19-1）は安行 2 式、ミニチュア土器（図 19-2）は晩期前葉でおそらく安行 3 b 式、土偶（図 19-3）は安行 1 式、石剣（図 19-4）は後藤（1986・1987）のいう晩期前葉のなすな原型 a 類にそれぞれ位置づけられる。

このような事例から過去の住居に対する儀礼行為は一過性のものでなく、断続的に行われていた可能性が考えられる。

3.3. 後期後葉以降の竪穴住居儀礼の複雑化

これまでの分析の結果、竪穴住居に関連する儀礼行為は儀礼が行われる住居によって以下の 2 種類に大別される。

A 類：儀礼が行われた時点で利用されていた、ないし廃絶されようとしている住居における儀礼行為。

B 類：儀礼が行われた時点ですでに廃絶されていた過去の住居跡における儀礼行為。

A 類の儀礼行為で用いられる儀礼関連遺物には以下の 4 種類がある。

- 1 類：後期・晩期を通じて安定的に用いられる儀礼関連遺物（注口土器、土偶、石棒・石剣）。
- 2 類：主として後期に用いられる儀礼関連遺物（異形台付土器、釣手土器）。
- 3 類：主として後期末以降に用いられる儀礼関連遺物（ミニチュア土器、土版、耳飾、手燭形土製品、動物形土製品、独鈷石）
- 4 類：儀礼が行われた時点よりも古い時期の儀礼関連遺物。

以下、A 類を用いられる儀礼関連遺物により細分して扱うこととする。例えば 1 類の儀礼関連遺物を用いる A 類の儀礼行為を A 1 類と呼称する。

住居床面から儀礼関連遺物が出土する例は後期中葉から晩期中葉までのいずれの時期にも認められることから、A 類は当該期を通じて行われたのであったと考えてよいだろう。後期中葉～後期後葉にかけては A 1 類、

A 2 類がさかんに行われ、後期後葉以降は A 1 類、A 3 類、A 4 類が行われた。

B 類については、後期中葉（加曾利 B 式期～曾谷式期）の住居跡に対して、後期後葉以降の儀礼関連遺物を廃棄する場合がほとんどである。遺物の時期としては後期末葉から晩期初頭（安行 2 式期～安行 3 a 式期）に位置づけられるであろうものが多く、B 類の儀礼行為は後期末葉から晩期初頭にかけて盛んに行われたものと考えられる。

また、その時期に非常に多く出土する耳飾が、より早い時期の住居から多量に出土することはほとんどない。このことから、B 類の儀礼行為に用いられる器種には選択が働いていた可能性が高い。

A 4 類に関連する遺物は、B 類ほどの量が認められない。時期としては後期末以降の住居に例が多く、B 類の儀礼行為が盛んに行われた時期と重なるようだ。A 4 類と B 類は過去の遺物・遺構に対する行為という点で共通性があり、同様の意味をもつ行為であったのかもしれない。

しかし、実際の行為としては、A 4 類は A 類の範疇にあり、過去の遺物であることが殊更に意識されていたかどうかは分からない。それらの遺物をどのような経緯で入手したのかも問題になるだろうが、伝世品、拾ってきたもの、などの可能性が考えられるだろうか。

A 3 類は A 2 類と交替するように現れる。耳飾をはじめとして、手燭形土製品、動物形土製品、ミニチュア土器など用いられる器種が多様である。これらが同一の儀礼行為に用いられたものなのか、あるいは異なる儀礼行為の痕跡が重複しているのかは現状では判別できない。決定的な根拠に欠けるが、最終的に竪穴住居内に残されるという点は共通しているので、A 3 類として一括した。いずれにせよ、後期末葉以降に儀礼関連遺物の器種組成が多様化していることは明らかである。

以上のように竪穴住居に関連する儀礼行為は複数存在したことが想定され、それらの行為の痕跡が入り混じって、結果として様々な時期の遺物が混在する複雑な出土状況を形成したのと考えられる（図 20）。

このような儀礼の多様化は特に安行 2 式期から安行 3 b 式期に顕在化する。それ以前の時期ではそうした様相は認められない。

3.4. 祖先祭祀の可能性

後期後葉以降に複雑化する竪穴住居儀礼はいったいどのような性格の儀礼なのであろうか。ここでは、A 4 類儀礼と B 類儀礼に着目し、これらが祖先祭祀の一

環として行われた行為であった可能性を検討する。

A 4 類は儀礼の当事者にとっては過去の遺物を用いた行為であり、B 類は過去の住居跡を舞台にした儀礼である。両者に共通するのは過去に対するはたらきかけを伴う行為であるという点であり、祖先祭祀に関連する行為であった可能性が考えられる。

集団の現成員の生活に過去の成員が影響をおよぼすという信仰に基づく宗教体系であるところの祖先崇拜において、子孫から先祖に対してのコミュニケーションは一定の儀礼を通じて行われ、この儀礼を一般に祖先祭祀という（田中 1987）。

A. ラドクリフ = ブラウン氏は祖先祭祀を広義の死霊崇拜とは明確に区別しており、社会的に認知された親子関係、系譜関係に基づく祭祀に限定している（ラドクリフ = ブラウン 1975）。また、M. フォーテス氏は単系出自集団において祖先から子孫へと権利義務として継承されるものとしている（フォーテス 1980）。

設楽博己氏は祖先祭祀の要件として、親族組織を基本単位とすること、ある程度の世代深度があり系譜関係が認識されていること、記念物と特別な儀礼が存在することをあげている（設楽 2009）。

竪穴住居儀礼の A 4 類および B 類は祖先祭祀の範疇でとらえることができるだろうか。A 4 類と B 類は後期後葉以降にみられるものであり、関連する遺構・遺物は主として後期中葉に位置づけられるものである。誤解をおそれず大雑把に捉えれば、安行式土器集団における加曽利 B 式土器集団に対する儀礼行為であるといえよう。

まず、世代深度について検討してみたい。加曽利 B 式の年代は加曽利 B 1 式（3820calBP ~ 3680calBP）、加曽利 B 2 式（3680calBP ~ 3530calBP）、加曽利 B 3 式（3530calBP ~ 3470calBP）とされており、A 4 類の儀礼が盛んに行われるようになると考えられる後期安行式は 3400calBP ~ 3220calBP とされている（小林 2008）。この年代観に従えば安行 2 式と加曽利 B 1 式は最大で 600 年離れていることになり、その間には相当な回数の世代交替が繰り返されていると考えられるので、両者の間には一定程度の世代深度があると考えてよいだろう。

しかし、両者の間に系譜関係が認められるかどうかは明らかではない。現在のところ考古学的に個人間の血縁関係を判定する方法は出土人骨の分析しかないだろう。本研究で扱った竪穴住居跡では人骨は出土していないため、形質人類学的方法や DNA の分析を行うことはできない。仮に人骨が出土したとしても、時間

差があるため形質の近似を以って血縁関係を推定することは不可能だろう。

続いて、親族組織について検討してみたい。A 4 類儀礼は住居廃絶時の儀礼の一類型であると解釈している。住居廃絶儀礼が居住集団、つまり家族単位で行われたのか、あるいは集落全体で行われたのかは定かでない。A 4 類の儀礼には比較的規模の大きい住居で多くみられるという偏在性があり、家族よりも大きな単位が関わっている可能性が考えられるが、それがどのような単位であるのかは分からない。

一方、B 類儀礼については一部の住居、とりわけ大型住居に集中する傾向があることから、A 4 類儀礼と同様にある程度広い単位で執り行われた可能性が考えられる。

以上のように、過去にははたらきかけるような儀礼は一家族を超えた単位で行われた可能性があるが、その単位がクランやリネージといった親族組織であるかは定かでない。

最後に記念物と特別な儀礼の存在について検討していく。A 4 類儀礼が行われる場合は安行式土器の集団にとっては通常の住居であり、特別なモニュメントであったとは考え難い。ただし、大型住居については検討を要する。大型住居の機能については未だ統一的な見解は得られていない。阿部芳郎氏は大型住居が住居としての機能を果たしていたかどうかは不明であるとして「大形建物址」という呼称を提唱した上で、各集落の代表が集まって地域的紐帯を確認・維持するための儀礼を行う施設であったとしている（阿部 2001）。高橋龍三郎氏はニューギニアのハウス・タンバランのように若い男性が共同居住し、イニシエーションなどの儀礼を行う施設を想定している（高橋 2013）。いずれにせよ、何らかの儀礼に関連する施設であったというのが概ね共通の理解であるといえようか。

B 類儀礼の場合、儀礼が行われる場はかつての住居跡である。馬場遺跡 11 号住居における土製品の垂直分布と土層堆積状況（図 18）から考えると、B 類儀礼が行われたのは住居廃絶後に上屋構造が崩壊し、竪穴が半ば埋まって凹地のようなようになった段階である可能性が高い。つまり、すでに住居利用時とは状態が変容している段階で儀礼が行われているのである。小杉康氏（1995）は記念物の条件として材質が不朽性であることと、設置状態が安定的かつ不動的であることをあげている。小杉氏の定義に従うならば大型住居が記念物であるとは認め難い。

過去の遺構に対するはたらきかけという点で類似した事例として、後期中葉から晩期にかけて関東南西部

でみられる土壙墓上に構築された配石遺構がある。群馬県天神原遺跡、山梨県金生遺跡などで確認された配石遺構は後期中葉から晩期後葉にいたるかなりの長期間をかけて構築されている。阿部友寿氏(2003)はこうした配石遺構が長期間にわたり継続的に構築されていること、追加される遺構が配石に限定されることから単なる遺構の重複ではなく、意図的な行為であると考えた。阿部氏はこうした意図的な遺構の重複を「遺構更新」と呼んでおり、配石の構築と並行して埋葬が追加されることから配石行為を通じて「墓」の記憶が保存されているものと解釈している。

阿部氏の理論を大型住居におけるB類儀礼に適用することはできるだろうか。後期中葉の大型住居が当時の人々にとって重要な施設であったとして、後期後葉以降の人々がその場で儀礼行為を行うことで凹地が重要な施設の跡地であったという記憶を保存したのではないだろうか。B類儀礼が一過性のものではなく、出土する儀礼関連遺物に時間幅があるという点も、繰り返し儀礼が行われて記憶が更新されたことを示唆する。住居跡は小杉氏(1995)のいうような不朽性をもった記念物ではないかもしれないが、廃絶後に儀礼を通じて記憶を保存する装置として機能した場であった可能性がある。

しかし、大型住居におけるB類儀礼と「遺構更新」による配石遺構との間には決定的な相違がある。「遺構更新」の配石遺構が土壙墓構築の段階から継続的に形成されているのに対して(阿部_友2003)、B類儀礼は大型住居廃絶からある程度時間が経過し、後期後葉に至ってから開始されているという点には留意しなければならない。

以上のように、A4類およびB類儀礼は祖先祭祀の要件を部分的に満たす可能性があるものの、祖先祭祀であると断定できるだけの根拠はない。

4. まとめと課題

縄文時代後期中葉から晩期中葉にかけての竪穴住居で出土する11種の儀礼関連遺物を分析したところ、時期によって儀礼関連遺物の出土量や出土する器種に相違が認められた。

変遷の画期となるのは後期後葉から晩期前葉にかけての時期であり、この時期に儀礼行為が活発化・多様化している。

竪穴住居儀礼を用いられる器種などから5類型に分類した。そのうち、住居よりも古い時期の遺物を使用するA4類儀礼と、すでに廃絶されている住居跡を儀礼の場として利用するB類儀礼は祖先祭祀としての

性格を帯びていることが想定されるが、断定するだけの根拠はない。

当初想定していた後期後葉から晩期初頭にかけての変容は、少なくとも竪穴住居儀礼の面では顕著であることを明らかにすることができた。

では、そのような儀礼の複雑化が生じた背景には何があったのであろうか。儀礼は社会的な行為であり、儀礼の変化は社会の他の側面における変化と連動している可能性が高い。したがって、生業などの経済的側面、墓制や人骨資料から復元される社会組織のあり方、他地域の様相、当時の環境等も含めて総合的に検討していく必要があるだろう。

本稿は2013年度に提出した修士論文を修正したものである。本稿を作成するにあたり、指導教員である設楽博己教授から大変熱心なご指導を賜りました。また、大貫静夫教授、佐藤宏之教授からは有益な助言を頂きました。佐倉市教育委員会の小倉和重氏には資料の実見に際して便宜を図って頂きました。ここに記して感謝いたします。

【参考文献】

- 阿部芳郎 2001 「縄文時代後晩期における大形竪穴建物址の機能と遺跡群」『貝塚博物館紀要』28:11-29
- 荒蒔克一郎編 2013 『上境旭台貝塚3』茨城県教育財団文化財調査報告368
- 市川修ほか編 1974 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告25
- 内田儀久 1978 「異形台付土器論(Ⅰ)」『奈和』16:14-38
- 内田儀久 1984 「異形台付土器論(Ⅱ)」『奈和』特別号:72-99
- 江原英編 2001 『寺野東遺跡Ⅲ(縄文時代住居跡編1・2)』栃木県埋蔵文化財調査報告書250
- 江原美奈子ほか編 2009a 『本田遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告313
- 柴山正広ほか編 2009b 『上境旭台貝塚』茨城県教育財団文化財調査報告325
- 江原美奈子編 2012 『上境旭台貝塚2』茨城県教育財団文化財調査報告364
- 小倉和重編 2009 『宮内井戸遺跡(旧石器時代・縄文時代本文編・分析編)(縄文時代遺物図版編)・(縄文時代遺構図版編)』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書266
- 小倉均ほか編 2000a 「南方遺跡」『櫛谷遺跡(第7次)・南方遺跡(第3次)・南方上台遺跡(第1次)・行谷遺跡(第2次)発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書274
- 小倉均ほか編 2000b 「南方遺跡」『櫛谷遺跡(第8次)・南方遺跡(第4次)・南方西台遺跡(第1次)・南方上台遺跡(第2次)発掘

- 調査報告書』浦和市遺跡調査報告書 289
- 忍澤成視編 1995 『市原市能満上小貝塚』市原市文化財センター調査報告書 55
- 忍澤成視編 1999 『祇園原貝塚』市原市文化財センター調査報告書 60
- 折原繁編 1978 『千葉市築地台貝塚・平山古墳』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告 2
- 金井安子 1997 「縄文人と住まい一炉の処理をめぐって」『青山考古』14：1-18
- 金子直行・大谷徹編 2006 『中野遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 322
- 川津法伸編 1998 『大橋 B 遺跡・釈迦才仏遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告 131
- 菅野和郎 2008 「ミニチュア土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 喜多裕明編 2011 『馬場遺跡第 5 地点(第 1 次・第 2 次)・道作古墳』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 295
- 桐原健 1976 「土器が投棄された廃屋の性格」『考古学ジャーナル』No.127：2-7
- 桐生直彦 1989 「住居間土器接合資料の捉え方：現状認識のためのノート」『土曜考古』13：1-19
- 小暮伸之 2004 「縄文中期集落における火災住居の性格—馬場前遺跡・上ノ台 A 遺跡の事例分析から—」『福島文化財センター白河館研究紀要』2003：131-146
- 小杉康 1995 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立」『駿台史学』93：101-149
- 後藤和民・庄司克 1973 「昭和 48 年度加曾貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』8：1-21
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上)」『考古学研究』33(3)：31-60
- 後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(下)」『考古学研究』33(4)：28-48
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」小杉康ほか編『縄文時代の考古学 2：歴史のものさし』同成社，257-269
- 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93：1-14
- 近藤敏編 1987 『菊間手永遺跡』市原市文化財センター 23
- 設楽博己 1983 「土製耳飾」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 9：縄文人の精神文化』雄山閣，206-217
- 設楽博己 2009 「縄文・弥生時代の祖先祭祀と親族組織」『考古学研究』56(2)：28-43
- 設楽博己・峯村篤編 2004 『下水遺跡 第 1 地点発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会
- 新屋雅明編 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 74 集
- 新屋雅明ほか編 2000 『石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 254
- 新屋雅明・菊池真編 2007 『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 339
- 菅谷通保 1985 「竪穴住居の型式学的研究」『奈和』23：5-32
- 菅谷通保 1995 「竪穴住居からみた縄紋時代後・晩期—房総半島北部(北総地域)を中心とした変化について—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』6：97-142
- 鷹野光行 1977 「関東地方の土版の分類について」『古代文化』29(10)：43-49
- 高橋龍三郎 2001 「縄文後・晩期社会の複合化と階層化過程をどう捉えるか」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47(4)：61-75
- 高橋龍三郎 2013 「縄文身体装飾の社会的意味」『公開シンポジウム 縄文時代装身具の考古学—身体の装飾をどうとらえるか—予稿集』早稲田大学先史考古学研究所，59-67
- 高橋龍三郎 2014 「戸ノ内貝塚からみた縄文後・晩期の集落と社会」『縄文時代後・晩期社会の研究：千葉県印西市師戸ノ内貝塚発掘調査報告書』早稲田大学文学学術院考古学コース，299-319
- 立木伸一郎ほか編 1985 『東北原遺跡—第 6 次調査—』大宮市文化財調査報告 19
- 田中真砂子 1987 「祖先崇拜」石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂，435-436
- 手塚達弥編 1997 『藤岡神社遺跡(本文編)』栃木県埋蔵文化財調査報告書 197
- 中村耕作 2007 「クッキー状・パン状炭化物」小杉康ほか編『縄文時代の考古学 5：なりわい—食料生産の技術—』同成社，253-259
- 中村耕作 2008 「釣手土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション，1064-1066
- 中村耕作 2013 a 「縄文土器の儀礼利用と象徴操作」アム・プロモーション
- 中村耕作 2013 b 「西関東・中部地方の釣手土器・異形台付土器」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜 I』國學院大學文学部考古学研究室，29-40
- 西野雅人編 2007 『千葉東南部ニュータウン—六通貝塚—』千葉県教育振興財団調査報告 572
- 蜂屋孝之 2004 「縄文時代後期の釣手土器」『先史考古学研究』9：59-83
- 蜂屋孝之 2006 「手燭形土製品考」『先史考古学研究』10：96-121
- 蜂屋孝之 2007 「手燭形土製品の最新資料と千葉県内出土例について」『千葉県教育振興財団研究連絡誌』68：1-9
- 蜂屋孝之 2008 「異形台付土器の終焉」『千葉縄文研究』2：51-67
- 蜂屋孝之 2012 「補遺 手燭形土製品について」『千葉縄文研究』5：75-88
- 蜂屋孝之 2013 「後期の釣手土器の検討」中村耕作編『縄文時代異形土器集成図譜 I』國學院大學文学部考古学研究室，9-17
- 林田利之編 2000 『吉見台遺跡 A 地点』印旛郡市文化財センター

- 発掘調査報告書 159
- フォーテス, M. 1980 『祖先崇拜の論理』田中真砂子訳, ペリカン社
- 瓦吹堅編 1977 『石畑遺跡』五霞村教育委員会
- 吹野富美男編 1999 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 前田村遺跡 G・H・I 区』茨城県教育財団文化財調査報告 146
- 古谷涉ほか編 2001 『千葉市内野第 1 遺跡発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会
- 堀越正行 1997 「異形台付土器と土偶の背景」『土偶研究の地平：「土偶とその情報」研究論集 1』勉誠出版, 193-214
- 三沢正善ほか編 1982 『乙女不動原北浦遺跡』小山市文化財調査報告書 11
- 安井健一編 2006a 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 5—君津市鹿島台遺跡(A区・D区)—』千葉県教育振興財団調査報告 529
- 安井健一編 2004 『西広貝塚Ⅱ』市原市文化財センター調査報告書 93
- 安井健一編 2010 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 10—袖ヶ浦市上宮田台遺跡 2 (旧石器・縄文時代)—』千葉県教育振興財団調査報告 638
- 柳田敏司編 1969 『奈良瀬戸遺跡』大宮市教育委員会
- 山本暉久 1978 「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3: 49-93
- 吉野健一 2007 「房総半島における縄文時代後・晩期の大型住居」安斎正人・高橋龍三郎編『縄文時代の社会考古学』同成社
- 吉野健一編 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 7—君津市三直貝塚—』千葉県教育振興財団調査報告 533
- ラドクリフ=ブラウン, A. 1975 『未開社会における構造と機能』青柳まち子訳, 新泉社
- 渡辺清志編 2007a 『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 336
- 渡辺仁 1990 『縄文式階層化社会』六興出版
- Wiessner, P. 2001 Of feasting and value: Enga feasts in a historical perspective (Papua New Guinea). In M. Dietler and B. Hayden (eds.), *Feasts: Archaeological and ethnographic perspectives on food, politics, and power*, pp.115-143, Smithsonian Institution Press.

[図版出典]

- 図 1：忍澤成視編 1995
- 図 2～図 6、図 8、図 10～図 17、図 20：筆者作成
- 図 7：市川修編 1974
- 図 9：小倉和重編 2009 を改変
- 図 18：喜多裕明編 2011 を改変
- 図 19：小倉和重編 2009

Pit Dwelling Rituals in Late and Final Jomon Period of East Kanto Region

Hirotsune NISHIMURA

Variety and large amounts of ritual goods excavated in the ruins of Late and Final Jomon period indicate that ritual acts have been actively carried out. This paper dealt with 11 ritual goods excavated in the pit dwellings in Late and Final Jomon period (from the phase of Kasori-B1 type pottery to that of Angyo-3d type) of East Kanto region and examined the appearance of pit dwelling rituals. The analysis of ritual goods in pit dwellings has indicated that these ritual goods increased in number and varied from terminal phase of Late Jomon Period through the beginning of Final Jomon. Moreover, there is correlation between the pit dwelling rituals and the scale of pit dwellings. The bigger the pit dwellings are, the more remarkable the evidence of ritual is. In addition, a number of the ritual goods from pit dwelling are often more recent or older ritual goods than dwelling itself. These facts, in this paper, were interpreted as the trace of rituals using pit dwellings that have been already been abandoned and ritual goods of the past that are no longer already used. These traces have been remarkable since terminal phase of Late Jomon. From the above, this paper concludes that pit dwelling rituals in East Kanto have been active and various since this stage.